

1

108

國文學社

二

東京圖書館

二冊

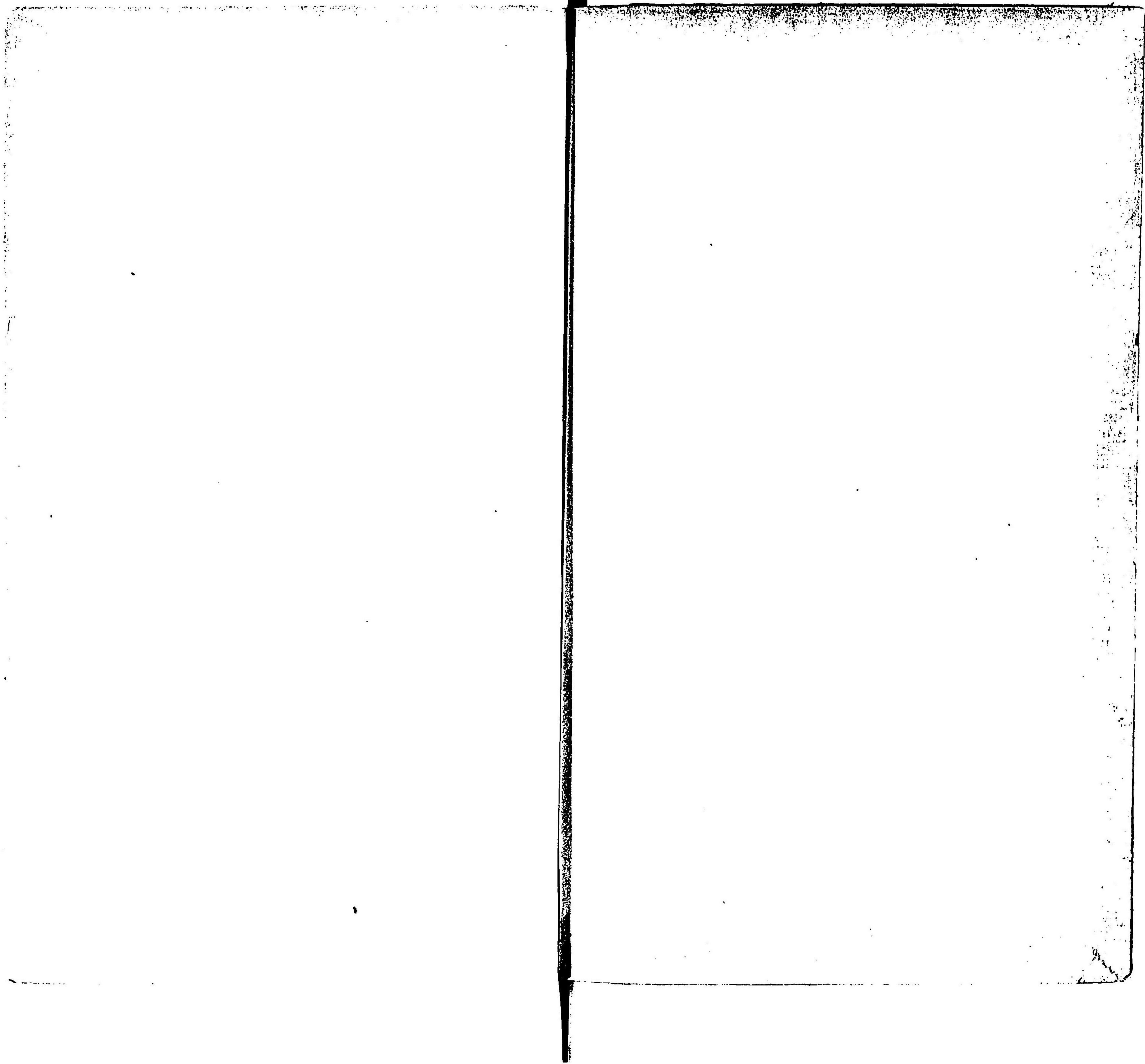
一八〇号

五架

一函

屬

類



國文學柱二之卷

門 辻村泰兄

權田直助著

同校

人 山田榎郎

作文準據

皇國の古文、大方、六つに分れたり。其の一つは、記事文なり。
古事記、風土記の類、古今の事實を記せるを以ふ。但漢文を除外。二つ
は、祝詞文あり。延喜式に載る、神の御前みまへ白す詞を以ふ。
三つは、宣命文なり。古事記なる、三柱の貴御子かみみこに、御事依みことよりの
文ふみ、神の皇御孫命みまごのみことに、御事依の文を祖おやとして、續紀以下、國史
に載れる、御世みよ々の詔書みことづかひを以ふ。四つは、壽詞ことばあり。古事記

大國主神國避の段の禱詞、書紀、顯宗天皇紀の室壽詞、倭姫世記の國壽の詞、また、大殿祭詞、出雲國造神賀詞、中臣壽詞此の詞半ハ記事等を以ふ。五つにハ、儀式文あり。古事記、二柱の神の御柱廻の段、岩屋戸の段の文を祖オヤとして、延曆儀式帳此も、記事の類を以ふ。六つハ、世系文あり。古事記、神代及、御世の御子等生坐の段の文を祖オヤとして、上宮記法王帝說古文彙こに載りたり。等不見えたる、世繼文の類を以ふ。其の中に、記事文ふは、叙事、記行、日記、地誌、戰記等の種々のあり。叙事ハ、古事記、安河御誓の段、日代宮此段、倭建命熊襲誅の文、出雲風土記、國引の文等ふ本まき、記行ハ、古事記、神日本磐余彦命東幸の段、又、倭建命東幸の段、倭姫世記、皇大神遷幸の段の文に本まき、

日記ハ、土佐日記、地誌ハ、風土記ふ本まき、戰記ハ、古事記、神日本磐余彦命東征の段、御眞木入日子印惠命の波迹安擊の段、伊久米伊理毘古伊佐知命の沙本毘古擊の段、息長帶姫命の忍熊擊の段等の文ふ本まき予よきなり。これ、予よ、文かこむむやする據所よありけり。然れば、此等の文を抄き出して、次々列挙りて、此の道に入り立たむ事、左の如し

○記事文

叙事

古事記安河御誓の段の文

こゝに、おの各もくくく、あ天免のや安すのの河を中ならふ置おまきて、うけふやきに、あ天ま照てらすおほ大み御の神みまづたけ建は速や須す佐さ之の男を

のみ^命こ^命せ^命のみ^命は^命ら^命せる、^十せ^命つ^命の^命つる^命ぎ^命を^命こ^命ひ^命わ^命る^命て、^三み^命き^命
 だ^命ふ^命う^命ち^命を^命り^命て、^打ぬ^命ち^命や^命も^命、^折ゆ^命ら^命ふ^命 この語ハ、次の文の、玉に
 り^命て、^命こ^命こ^命に^命入^命り^命た^命る^命あ^命る^命べ^命け^命れ^命バ、^命省^命く^命べ^命し^命。故^命ふ、^命ソ^命ノ^命ヒ^命ト
 域^命を^命加^命へ^命つ^命。こ^命ハ、^命記^命傳^命ふ^命も、^命疑^命く^命き^命由^命言^命ハ^命ま^命た^命り^命。ソ^命ノ^命ヒ^命ト
 キ^命ダ^命ヲ、^命あ^命免^命の^命ま^命あ^命る^命に^命ふ^命り^命す^命と^命ぎ^命て、^命さ^命ぶ^命み^命に^命か^命み^命て、^命ふ^命き^命
 う^命つ^命る^命い^命ふ^命き^命の^命さ^命ぎ^命り^命に、^命あ^命り^命ま^命せ^命る^命か^命み^命の^命み^命な^命ハ、^命た^命ぎ^命り^命
 び^命免^命の^命み^命こ^命せ^命、^命ま^命た^命の^命み^命あ^命ハ、^命あ^命ま^命つ^命志^命ま^命ひ^命免^命の^命み^命こ^命せ^命と^命ま^命
 を^命す^命。こ^命ハ、^命所^命作^命の^命繁^命く^命て、^命つ^命ぎ^命に、^命マ^命タ、^命ソ^命ノ^命ヒ^命ト^命キ^命ダ^命ヲ、^命ア^命メ^命ノ
 マ^命ナ^命年^命ニ^命フ^命リ^命ス、^命ギ^命テ、^命サ^命ガ^命ミ^命ニ^命カ^命ミ^命テ、^命フ^命キ^命ウ^命ツ^命ル^命イ^命ブ^命キ
 ノ^命サ^命ギ^命リ^命ニ、^命ナ^命リ^命マ^命セ^命ル^命カ^命ミ^命ノ^命ミ^命ナ^命ハ、^命い^命ち^命き^命志^命ま^命ひ^命免^命の^命み^命
 こ^命せ^命、^命ま^命た^命の^命み^命あ^命ハ、^命さ^命よ^命り^命び^命免^命の^命み^命こ^命せ^命と^命ま^命を^命す^命。つ^命ぎ^命に、^命マ
 タ、^命ソ^命ノ^命ヒ^命ト^命キ^命ダ^命ヲ、^命ア^命メ^命ノ^命マ^命ナ^命年^命ニ^命フ^命リ^命ス、^命ギ^命テ、^命サ^命ガ^命ミ^命ニ

カ^命ミ^命テ、^命フ^命キ^命ウ^命ツ^命ル^命イ^命ブ^命キ^命ノ^命サ^命ギ^命リ^命ニ、^命ナ^命リ^命マ^命セ^命ル^命カ^命ミ^命ノ^命ミ
 ナ^命ハ、^命た^命ぎ^命つ^命ひ^命免^命の^命み^命こ^命せ^命 はやすさのをのみこせ
 あ^命ま^命て^命ら^命す^命な^命ほ^命み^命る^命み^命の、^命ひ^命た^命り^命の^命み^命づ^命ら^命ふ^命ま^命ら^命せる、^命や^命ハ
 さ^命の^命粒^命ま^命ぶ^命る^命ま^命の^命い^命ほ^命つ^命の^命み^命す^命ま^命る^命粒^命た^命ま^命を^命こ^命ひ^命わ^命る^命し
 て、^命ぬ^命な^命や^命も^命、^命ゆ^命ら^命に、^命あ^命免^命の^命ま^命あ^命る^命ふ^命ふ^命り^命す^命と^命ぎ^命て、^命さ^命が^命み
 に^命の^命み^命て、^命ふ^命き^命う^命つ^命る^命い^命ぶ^命き^命の^命さ^命ぎ^命り^命に、^命あ^命り^命ま^命せ^命る^命か^命み^命の
 み^命あ^命ハ、^命ま^命さ^命の^命あ^命ふ^命つ^命か^命ち^命は^命や^命び^命あ^命免^命の^命あ^命志^命ほ^命み^命の^命み^命こ^命
 を^命 やまをす。 この所作の繁くて、また、みぎりのみづづらにま
 か^命せ^命る、^命ヤ^命サ^命カ^命ノ^命マ^命ガ^命タ^命マ^命ノ^命イ^命ホ^命ツ^命ノ^命ミ^命ス^命マ^命ル^命ノ^命多^命ま^命を^命こ^命
 ひ^命わ^命た^命て、^命又^命ナ^命ト^命モ、^命ユ^命ラ^命ニ、^命ア^命メ^命ノ^命マ^命ナ^命年^命ニ^命フ^命リ^命ス、^命ギ
 テ、^命さ^命ぶ^命み^命ふ^命か^命み^命て、^命ふ^命き^命う^命つ^命る^命い^命ぶ^命き^命粒^命さ^命ぎ^命り^命に、^命あ^命り^命ま^命せ

るかみのみかひ、あ^天免^也のほ^等ひ^卑のみ^命こ^命せ **やまをす。** [△]ま^御あ^髪つ
 らにま^るせる、ヤサカノマガタマノイホツノミスマルノた
 まをこひ^わる^て、又ナトモ、ユラニ、アメノマナキニフリ
 ス、ギテ、さ^ぶみ^にか^みて、ふ^まう^つる^はぶ^まの^さぎ^りに、な
 りませ^るか^みの^みか^ひ、あ^天ま^津つ^日ひ^子こ^根の^みこ^命せ **やまをす。** [△]ま
 た、ひ^左た^りの^みて^みま^るせる、ヤサカノマガタマノイホツノ
 ミスマルノたまをこひ^わた^{して}、又ナトモ、ユラニ、アメノ
 マナキニフリス、ギテ、さ^ぶみ^みか^みて、ふ^まう^つる^はぶ^ま
 の^さぎ^りに、あ^りませ^るか^みの^みな^は、[△]は^活く^津つ^日ひ^子こ^根の^みこ^命
やまをす。 [△]ま^あ、^みぎ^りみ^てみ^まる^{せる}、ヤサカノマガタ
 マノイホツノミスマルノたまをこひ^わる^て、又ナトモ、

ユラニ、アノノマナキニフリス、ギテ、さ^ぶみ^みか^みて、ふ^ま
 う^つる^はぶ^まの^さぎ^りに、あ^りませ^るか^みの^みか^ひ、[△]ま^熊あ^野ぬ
 久^須す^比の^みこ^命せ **やまをす。** [△]ま^あ、^みぎ^りみ^てみ^まる^{せる}、ヤサカノマガタ
 字^ルて^書ける^ハ、含^詞を^示せる^{ナリ}。こ^ハ、次^子舉^{ぐる}、
 國^引の^文を、其^の續^けさ^まの^同ト^まを^ルて^知る^{ベシ}。
 以上^の文^ぞも、上^長の^條に^引ける、天^照大^御神^の御^装の^文
 の^類み^て、而^の字^を多^く重^ねたり

出雲風土記國引の文

國^引に^ひき^ませる、^ハつ^東か^水み^臣づ^津お^野み^命つ^命ぬ^のみ^こせ^のり^たま
 ば^く。^ハつ^初く^國も^たつ^出は^雲つ^もの^くに^ハ、^ハさ^ぬの^さは^さく^にあ^る
 る^も。^ハつ^初く^國に^さば^くつ^くら^せり。か^れ、^ハつ^作く^りぬ^ハむ^せの^り
 た^まひ^て、^ハつ^初く^國ふ^すま^志ら^羅ぎ^紀の^みさ^まを、^ハつ^初く^國の^あま^り、^ハつ^初く^國

りありやせみれば、^久にのあまりありやせのりたまひて、^而を^女免のむなすきやらして、^而おほい^大をの^魚きたつきわけて、^而みつみ^三は多^波す^須き^支ほ^總ふりわけて、^而みつみ^身

のつなうちかけて、^而志^志もくるかづら、^開るや^開くるやに、^國久にこ

久にこそ、ひ^引きて^來ぬへる^縫くに、^國こづよりうちた^絶ちて、^八や^持ま

よ^米ぬ^支き^支づ^支きの^脚み^崎さ^崎き^崎なり、^延は^延れる^格あり。下の^同格の^文こ

久にせのさ^名ひ^佐ある、^名お^北ひ^費や^山ま^山これ^持あり、^持また^持もち^引ひ

にを^久にの^久あまり^久あり^久や^久せ^久み^久き^久ば、^久にの^久あまり^久あ

りせのりたまひて、^而を^女免のむなすきやらして、^而おほい^大をの^魚きたつきわけて、^而みつみ^三は多^波す^須き^支ほ^總ふりわけて、^而みつみ^身

きだつきわけて、^而みつみ^三の^身つ^身な^身う^身ち^身の^身けて、^而か^志は^志くる^志か^志づ^志ら

く^久る^久や^久くる^久や^久に、^久に^久こ^久く^久に^久こ^久せ、^久ひ^久ま^久して^久ぬ^久へ^久る^久久^久に^久ハ、^久た^久

く^久より^久うち^久た^久ち^久て、^久さ^久た^久の^久久^久に^久これ^久あり、^久また^久きた^久た^久ぞ^久ら^久は^久の

あり^久せ^久の^久り^久たま^久ひ^久て、^久を^久免^久の^久む^久な^久す^久き^久やら^久して、^久に^久の^久あ^久ま^久り

お^久ほ^久い^久を^久の^久き^久だ^久つ^久き^久わ^久け^久て、^久みつ^久み^久の^久つ^久あ^久う^久ち^久の^久け^久て、^久の^久は^久

は^久た^久す^久き^久ほ^久ふ^久り^久わ^久け^久て、^久みつ^久み^久の^久つ^久あ^久う^久ち^久の^久け^久て、^久の^久は^久

くるかつら、くるやくるやに、
 ぶ^レぬ^レの、もそろもそろに、
 る^レくみ^ハた^キみ^ホよりうちた^チて^レ、^開み^見のくみこれなり。^ま
 た、^高志^之の^都の^みさ^きを、^久にのあまり、あまりありややみ
 れバ、^くみのあまりありやのりたまひて^而、^大を^免のむあすま
 せら^レて、^而おほ^心をのきだつ^きわ^けて、^而みつ^みのつなうち^の
 け^レて、^志も^くる^かづら、^くる^やくる^やに、^久に^くみ^こや^ひま
 かば^ぶぬ^レの、もそろもそろに、^久に^くみ^こや^ひま
 きてぬへる^くに、^みほ^のさま^これ^あり。[△]も^ちひ^ける^つあ^ハ
[△]夜^見よ^みま^これ^なり。[△]か^た免^たて^レか^ハば^くま^のく^にあ^る、
^二書^一か^た免^たて^レか^ハば^くま^のく^にあ^る、

おほ^大の^神みの^をあ^とれ^なり

上の文や、此の文や、既に^も以^へる^如く、古文の中^も、殊
 ぶ、高く秀で^美しく、又、各條、同^レ詞^をもて書き成せる^こ
 や、最^珍し。今の人^ハ、同語の重るを嫌ひて、強ひても、語をか
 へて書く^こや^かる^を、上古^ハ、其^を反^りて、同語^をも^忌ハ^ざ
 る^こや、見^えあり

古事記、日代宮^景行^天の段、倭建命^建熊曾^建を誅^ち賜^へる所の文
 此の文、自然、篇^を成^せる^が如^く。故^今、試^みに、章段^を分^ちて
 發端^起進^成收^結尾^等の字^を注^し

こ^のに、す^免ら^みこ^を云^くのり^たま^はく。^發端^のの^たみ^く
 ま^そた^ける^ふたり^{あり}。これ^まつ^ろは^ずテ、^免る^やか^まひ^やど

もあり。かれ、そのひびきをもをせれせのりたまひて、つゝのハ
たまひま。△このせきにあたりて、そのみよ、みひたひ
ゆはせう。△に、をうすのみを、そのみを、やまやひ免の
みよせの、みよ、みよをたまはりて、たちをみふやとろみはれ
て、まよき。進○こい、人名物名多く重△かれ、くまをたける
がひへに、ひたりてみたまへば、そのひへのほやりに、ひくさ
みへにかきみテ、むろをつくりてぞをりける。△に、ひひむ
ろうたげせむや、ひひやよみて、をくものを、まけそなへたり
き。△かれ、そのあまをあるまで、そのうたげするひをまちた
まひま。△に、そのうたげのひひなりて、上のうたげせ
ゆはせるみよ、みよを、上の、みよをみひたひに、を免のかみ
ゆはせるみよ、みよを、上の、みよをみひたひに、を免のかみ

のごせけづりたれテ、そのみを、みよ、みよをけして、みよの
みよをたまひすで、を免のすたみなりて、上のを免の
やみ、呼をみあやものなかに、まより多ちて、そのむろぬちみ
以りまよき。△上の、むろをつくりて、み、對應す。○こに、くま
そたける、あにをせふたり、上の、ふたりあり。そのを免を上
を免のすが、み免で、おのぶなかにまよせて、さかりにうま
たみ、對應す。△上の、うたげせむ△かれ、そのたげふはなるせきに、上の
げたり。△の語、み、對應す。△かれ、そのたげふはなるせきに、上の
まひするひをまちたみふやとろより、たちを上の、たちをみふ
の語、み、對應す。△みふやとろより、たちを上の、たちをみふ
對照す。△みだして、くまをそごころものくひをせりて、たちも
よ、そのむねよりさへをほしたまふ。△この所作の繁くて、その
せきに、この文、原本に、自其胸刺通之時やあるを、ソノムネヨ
リサントホシタマフトキニや、訓を加へられたれど

文字みつきてハ、然よむべきあれども、然ありてハ、第建が逃
 出す方の主をありて、文義通えかぬえり。思ふに、必、語傳の誤
 りなるべし。そのをせたる、みかこみて、にけい^出てき^言すな
 故、今改免つ。そのをせたる、みかこみて、にけい^出てき^言すな
 はち、そのむろのは^荷のもせみ、おひはたりて、そのせを^取ら
 へテ、たちヲもて、^尻よりさ^刺せ^通は^{久尺}たまひき。成^言こ^言に、そ
 のくまそたけるまを^はつらく^言。そのみたちを、かうごの^言た
 まひそ。われ、まをすべきことをありせまをす。かれ、志ま^言ゆる
 して、お^押ふ^伏せたまふ。こ^言に、まを^言つらく^言。お^言み^命こ^言を^言ハ、た
 れみますぞ。あ^言ハ、ま^言ま^言む^言く^言の^言ひ^言ろ^言のみ^言や^言に^言ま^言し^言て、お^言
 ほ^言や^言ま^言ぐ^言に^言志^言ろ^言免^言す、お^言ほ^言た^言ら^言ひ^言こ^言ち^言ろ^言わ^言け^言の^言す^言
 免^言ら^言み^言こ^言せ^言のみ^言こ^言み^言か^言ハ、や^言ま^言を^言を^言か^言の^言み^言こ^言み^言ま^言す。お^言れ
 く^言ま^言そ^言た^言ける^言ふ^言たり、ま^言つ^言ろ^言ハ^言ず、^無る^言や^言あ^言し^言せ、ま^言こ^言免^言して、

〇れをせれせ、のりたまひて、つのはせしや^上の、み^言こ^言せ^言の^言乃
 りたまひき。こ^言ハ、^格言^多く^言して、^延ハ^言り^言たる^言。〇
 そ^言た^言ける、^〇ま^言こ^言せ^言の^言ま^言さ^言む。に^言の^言か^言た^言み、^〇あ^言れ^言ふ^言たり^言を
 お^言きて、^〇た^言け^言く^言こ^言ば^言き^言ひ^言や^言あ^言し。志^言る^言に、^〇お^言ほ^言や^言ま^言せ^言の^言之^言に
 み、^〇上^言の^言に^言の^言か^言。われ^〇ふ^言たり^言に^言ま^言して、^〇た^言け^言き^言を^言ハ^言い^言ま^言し^言け
 り。〇^〇こ^言を^言も^言て、^〇あ^言れ^言、^〇み^言か^言を^言た^言て^言ま^言つ^言ら^言む。いま^〇よ^言り^言の^言ち、^〇や^言ま
 を^〇た^言ける^言のみ^言こ^言せ^言、^〇た^言し^言へ^言ま^言を^言す^言べ^言し^言や^言ま^言を^言し^言き。〇^〇こ^言の^言こ^言せ、
 まを^〇し^言を^言へ^言つ^言れ^言ば、^〇す^言か^言は^言ち、^〇ほ^言ぞ^言ち^言の^言ご^言せ^言ふ^言り^言さ^言ま^言て、^〇こ^言ろ
 した^〇ま^言ひ^言き。收^〇かれ、^〇その^言を^言ま^言より^言ぞ、^〇み^言か^言を^言た^言へ^言て、^〇や^言ま^言を
 た^〇ける^言のみ^言こ^言せ^言ハ^言ま^言を^言し^言ける^言尾^〇

此の文ハ、上世の普通の文みて、綾もあく、潤色もなく、たゞ

事實を正しく、質朴スナホに書きなせるものにて、叙事文の常格なり。文かゝむハ、先、此等より、學ぶべきものやぞ思ゆる

高橋氏文、磐鹿六雁命大嘗小仕奉る傳の文

○桂立まくもかーこまままむくのひ志ろのみ官に、あ免の志
た志ろー免志、おほたらひこおーるわけのす免らみこ
のひそやせまりみせせ、みづのやのみのやのはづき、ま
へつぎみたちのりたまはく。物名重りて、延はりたる格あり。○朕愛まかこ
をおもふこや、いつのらやみおむ。をうすのみこのむけたま
ひくにぐを免がりみむやおもふやのりたまひき。この
つまいせみいてまーて、うつりて、あづまのこにいりまー
まかむあづき、かみつふさのこにのあのうま志まのみや

み、以たりまーま。○そのやま、いはかむつるのみこや、みやも
つのへまつりき。す免らみこや、かつ志のぬみいでまーてみ
かりせ免たまひき。おほぎさまやささかひ免ハ、かー
りーみやふまーーまのやま、おほぎさま、いハかむつが

りのみこやみのりたまはく。○このうらふあやーまやりのこ
意きこゆ。それがくくやあけり。○そのかたちを、みまくおも
ふやのりたまふすあはち、いはるむつるのみこや、ふぬみ
のりて、やりのもやみいたりーるややりおぞるまて、こやう
らにぞびき。おほおひゆけぞも、つひみえとらず。こに、いは

かむつぶりのみこせ、せとひけらく、女鳥あせりよ。そのこを志
 多いて、かたちをみむせするに、せうらにせびうつりて、そ
 のかたちをみ志免ず。以まよりのち、えくぶみあふらざれ。も
 一、おほつちの志多ふをらば、かあらず、志みあむ。わだかかを
 もて、すみかせせよせひひて、かへるせまみ、せもをかへりみ
 れば、魚を多おほくおひく。來言語みよりて、延[△]すなはち、いはるむ
 つぶりのみこせ、つぬはずのゆみをもて、うけるうをの中の
 にあてし密のバ、すあはちはずみつきてひてど、たちまちに、あ
 またのうをいえたり。△仍かれ、おづけて、かたうをせひひしを、魚
 ま、こせおふに、かつをせむいふなる。以ま、つぬをもて、つりば
 をうつるハ、○此所の文、通えかぬ。○松ふね、志ほのかるとにあ
 のよしあり。レベシ。脱語あるふや。言ふね、志ほのかるとにあ

ひて、すのうへにみぬ。△ほりいふさむせするに、ハ尺やさこの志白ろ
 うむぎびせつをえあり。△いはらむつがりのみこせ、そのふた
 くさのものをささげて、おほぎささみ多てまつりき。○かれ、お
 ほぎささき
 ほ || 免あまひ、
 よろこびあまひ
 てのりたまはく。○あせりよ
 きよくつく

りて、御食みけみたてまつらむせ、おもふせのりたまひき。○そのせ
 き、いはかむつぶりのみこせまをさく。△むつがりおつくらせ
 て、たてまつらむせまをして、全無邪志むぶりのくにのみやつこせ
 ほつかや、おほたけび、ちよぶのくにのみやつこせほつか
 や、あえのうはくらあえの志たはらびせをもよば志免て、
 なますふつくり、また、につ。やまつ。くさびくは、

つくりもりて、
かばわやまのは志のいをみて、たのすまやつ
カハワヤマノまの葉をみて、ひらすきやつ

にさーつくり、
ひの影げをせりてかづらや
かまの葉をみてみづらをまき
にさーつくり
まじもかづらをせりてたすきみかけ

みあゆひをゆひ
おびふーあゆひをゆひの十字ハ、こゝふ
用なく、はる、文格おも叶ハざれバ、錯亂な

す免らみこせ、みよりよりかへりひりますせまふ、たてまつ
れり。こゝ、物の名、また、所作の多のせまのりたまはく。たれ
がつくりて、たてまつれるものぞせやひたまひま。そのせま、
おほぎさままをーたまはく。こゝハ、いはらむつごりのみこせ

お、たてまつれるものなり「せ、まをーたまひければ、すおはち、
よろこびあまひ
ほー免あまひ
て、のりたまはく。こゝハ、いはらむつごりのみ

こせひせりおこるるに
この語あるを思ふに、こゝも、必
あるべきな
あらず。こゝハ、あ免おますかみの、おこないたまへ

るものなり。おほやまのくに、おこなふねをりて、か
おほする之にあり。いははかむつごりのみこせハ、わがみこた
ち、あれみこのやそつごまお、せほく
す免らぶあまつみけ

を
いはーひ
せりもちて、つるへまつれ「せおほせたまひて、す

ゆまはり

なはち、若湯ゆるむのむらたらがは志免のおや、ものくべ部のお
 ほ免布ふのむら連トのはける佩たちを、せきおか志免てそへたま
 ひき。こい、言語を名をまた、このおこあふわおハ、おほせもた
 ちならびて、つらへまつるべきものに、原書み止ありや
 のりたふひて、ひのたて、かげせもの、くおごとのひせを、ゆる
 ちうつして、おほせも部べせをづけて、いはるむつぶりのみこ
 せふたふひき。言語、また、綾語よまゐ、もろくと氏うぢびせ、
 ひむおーのかたの、くにぶと氏みやつこ、せをまりふ二あうぢ
 のまくら教ご、おのく、ひせりづたてまつら志免て、ひらす
 き、比れをたまひてよさーたまひき。やまぬ、うみるはのもの尺

ば、たみぐとのさわあるまわみ、かへらののとふさわみた

以下、二十二字、こい、在 はたのひろもの、けのあらもの、
るべき語にあらば何よ はたのさーもの、けの
かれ、域を加へて分てり はたのさーもの、けの

なへまつるくさぐさのもの、せもを、ふさ祢せりもちて、つら
 へまつれせ、をさーしたるひき。こい、言語を綾語よ

したまふとせハ、あひせりのことろに、あらこい、あ免お
 ますかみのみこせぞ。あひみこ、いはかむつぶり氏みこせ、も

ろせも、ろびせらをもよ布ーひきるて、いそーみて、つのへ

まつれせ、おかせたるひ、てよさーまひき。こい、言語みより
うけひたるひ

△¹のせき、か^上みつふ^總さの^國くにの、あ^{安房}いのお^大おの^神みを、^{御食部神}みけつ^の
み^言せる^若せまつりて、わ^{湯坐}ゆる^連むら^始らぶ^免は^租免^意のお^出や^出
ほ^富免^布ふの^連むら^子らぶ^豊こ^豊せ^日ひの^連むら^連らぶ^てを^火して、^鑽びを^免ま^免ら^免

て、こを^以み^火び^せして、^以は^{||}ひ^て、^みけ^をた^てる^つり、^まる^お
^ゆま^らへ^て

ほや^ハー^ハま^ハみ^ハか^ハる^ハざ^ハり^ハて、^をさ^る免^て、^かむ^ふへ、^おほ^を
^ハを^止こ^をを^止免^をを^免

み^嘗へ^嘗せ^もみ^つの^へま^つり^そ免^ま
此の文、上の文^に比^べて、^大く^下れ、^だも、^然す^ふみ

古^録録^{せる}もの^なれ^バみ^や、^古格^を失^はさ^るもの^なり
古事記、朝倉宮の段、葛城山御嶺の文

△^天す^皇免^葛ら^城み^山こ^山せ^まが^まつ^らき^のや^まに^のぼ^りひ^でま^せる^せき、^百つ^官の
さ^衣ぶ^服く^をの^ひせ^ぶも、^こせ^ぶも、^あの^紅ひ^紐も^つけ^る、^あを^青ざ^摺り^け
き^ぬを^たま^はり^てま^たり^た。○^{その}せ^きに、^{その}む^らひ^のや^ま
の^をよ^り、^やま^のう^へみ^のぼ^るひ^やあ^り。○^すで^み、^す免^らみ^こ
や^の、^みゆ^さの^つら^みひ^やー^く、^{その}よ^そひ^のさ^ま、^{また}、^ひせ
い^も、^あひ^にて^わる^れず。○^{上の}、^つら^さく^くの^ひせ、^云、^ま
す。○^に、^す免^らみ^こせ^みや^らして、^せい^く免^たま^はく。○^{この}
や^ませ^のく^ふ、^あれ^をお^きて、^{また}、^きみ^いな^まを、^いま^たれ
ぞ^かく^てゆ^くせ、^はー^免た^まひ^ーの^バ、^こた^へま^をせ^るさ
ま^り、^す免^らみ^こせ^のお^ほみ^こせ^のご^せく^あり^き。○^{上の}、^す免^ら
の^みゆ^きの^云△^に、^す免^らみ^こせ、^いる^くい^らして、^やさ^刺

したまひつゝのさぶくらのひやぶも、こやぶくに、やさしけ
 れバ、^かのひやぶも、みな、やさせり。^かれ、す免らみこや、また
 やい、^免たまはく。^言あらば、^其のなをのらさぬ。^おのもこ
 くをのりて、^やはな^{たむ}せ、のりたまひき。^こに、こたへま
 をさく。^あれ、まづせはえたれ、^あれ、まづなのりせむ。^あは、
^ごこ^事やもひやこや、^ごや^事この^神かみ、^かづ^城ら^言ま^主のひやこやぬ
 ーのおほ^大お^神みなりや、まをーたまひき。^こ、^言語^をと^りて、^延は^りる^格あり。^言こ
 へみ、す免らみこや、かーこみてまをーたまはく。^かー^こし。^あ
 おおほがみ、うつーおみまさむせい、^させ^らざ^りま^せ、まをー

たまひて、^その^よそ^ひの^云く、^あい^念大^御おほ^みた^ち、^また、^ゆみ^やを
 はし免て、つゝさぶくらのひやぶもの、けせるきぬをぬらし
 免て、^をろ^のみ^てた^てま^つり^ま。^こ、^事物^繁く^て、^延か^れ、^その
 ひやこやぬ^しのおほ^大お^神み、^てう^ちて、^その^さと^げもの^をう^け
 たまひき。^かき、^す免^らみ^こや^のか^へり^ます^やき、^その^おほ^大お^神
 み、^やま^をく^だり^まして、^はつ^せの^やま^のく^ちお^おくり^まつ
 りき。^かき、^この^ひや^こや^ぬし^のお^ほお^みハ、^その^やま^をお^おり、^あ
 らはれませる

此の文、さばかり綾もなく書續けたるものゝら、けだのく
 美しきハ、古文の、自然、妙ある所なるべし。其の中み、一言主
 大神の、御答への御言の神くしきハ、言ひ志らず感くなむ

竹取物語かぐや姫上天の文

八月ハチグヱ望ハルありの月に出でて、かぐやひ免ヒメノ、以ヨて、以ヨるくなま
給たまふ。人ヒト目メも、今はつらみ給はずなまき給たまふ。是コトを見て、親オヤども、
何ナニ事コトぞやとひさねサネ。かぐや姫カグヤヒメ、なくくク以ヨふ。先マくも、まうさ
むせおもひヒるレども、かならずナラズ、こころまぜはく給はむもの
ぞやおもひて、今イマまで、すごゴい侍りつるなり。さのみやハアル
べきせて、うち出で侍りぬヌるぞ。おのノ身ミハ、此コノ國クニの人ヒトみも
あらず。月ツキのみやこの人ヒトなり。上の、望ありの月み、出
むるルのちぎりありけるみよりミヨリテなむ、此コノ世界セカイハ、まう
できたりける。以ヨまハ、かへるべきトキになりみけれレバ、此コノ
月ツキの十五日イハヒに、かのもせの國クニより、むかへヘ、人ヒトとまうルてこむ

ず。さらずガ、まハりぬべけれレバ、おぼホくなげルむハかハき事コト
を、この春ハルよりおもひかけケき侍りありを以ヨひて、以ヨみトくな
くク翁オノハ、なハでうこせをのたまふぞ。竹タケの中ナカより、見ミつけケまこ
えたりしレを、おたねオタネの大きオホきさニおはせしを、わハたけニた
ちならぶまで、やハしハひ奉りたるわハの子コを、何人ナニヒトのむハへ聞
えむ。まさマにゆるさむやヤを以ヨひて、我ワレこそ志シを免メせて、なきの
と志シる事コト、以ヨせムへがたげあり。以上二句、言語ハより
姫ヒメの以ヨふ、月ツキのみやこの人ヒトみて、父母ウチノヤチノハあり。延ノビはりたる格あり。か
の國クニよりまうルてこハるレども、かく、此コノ國クニハ、あまたの年トシを
へぬるにかむありける。彼カノ國クニの父母ウチノヤチノハの事コトもおぼえず。こ
にハ、かハくひさしくあそびアソびきこえて、ならひ奉れり。以ヨみトる

らむことちもせず、かあしくのみなむある。されど、おの心
 ならず、まゐりあむやするるの字衍にや。やひひて、もろやもみ
 みどくなく。延ばりたる格あり。つのはるゝ人も、つのはるゝ人ともやどろ
 ならひて、立ちわのれなむ事をこの文、次の語へついでかす脱文あるにや。心ばへ
 など、あてやるにうつゝかりつる事を、みあらひて、こひ
 からむ事のたへがたくて、湯水ものまれず、おあじ心み、なげ
 かくがりけり。記この事をみるぞ、まこゝ免して、竹取の家へ、御
 使ヲつらばさせ給ふ。御使み、竹取出であひて、なく事かまり
 なし。此の事をなげくに髪もまろく、腰もかゝまり、おけり。翁、今年ハ、五十
 目もたゞれ

ばのりこなりけれども、物思ひみ、かた時みなむ老いおな
 りみけりやみゆ。御使おほせごせして、翁みいふ。心を心ぐる
 し、物思ふなるハ、誠みかや、おほせたまふ。竹取なくくま
 うす。此の十五日になむ月の都より、かぐや姫のむらへにま
 うでくある。たふやくモせはせ給ふ。此の十五日み人々給
 はりて、月の都の人まうでこバ、せらへさせむをまうす。御使
 のへりまありて、おまなのありさまをうして、そうつる事
 をもつまうす。をハ衍りを二のを三るべし。今補へり。まこし
 免してのたまふ。ひや免見給ひ、御心みだに、わすれ給はぬ
 ぬ、明けえれ、見なれたるかぐやび免をやりてハ、いふと思ふ
 べし。こゝにハ、望のたまひでなぞかの十五日ハ、つらさぐ
 ありけむ脱ちたるみや。

くみおほせて、ちよく〜にハ、少將、高野のおほくにせよふ人
 をさして、ろく志のつらさヲあはせて、二千人の人を、竹やり
 が家ふつのはす。家ふまゝりて、
 ついでの上ふ千人、
 の上ふ千人、
 家の人、
 以や、おほかりけるみ合せて、あけるひまもあくまもらす。
 のまもる人とも、弓矢たひしてをり。もやの内ふハ、女どもヲ
 ばんふすゑて守られ。
 女、ぬりご免の内ふ、かぐやび免を以
 翁も、ぬりご免のせを――を――さ――
 だるへて――をり。
 おきあのいふ、かばりまもる所ふ、
 し――て、やぐちみをり。
 おきあのいふ、かばりまもる所ふ、
 らむおなぞあらまほしき所なり。天の人おもまけむやせよ

ひて、やの上ふをる人々にいはく。露も、物そらにかけらば、
 や、いころ〜給へトイフ。
 上の、月の都の人を、せまもる人との
 いかばかりしてまもる所ふ、かほり一つだふあらば、ま
 づ、いころ〜して、外ふさらさむせ思ひ侍るやいふ。翁、これをま
 して、たのも〜がりをり。是をきとて、かぐやび免ハ、さ〜こ免
 てまもり、た〜るふべき、またぐみをまたりせむ、あの人
 を、得た、かはぬあり。弓矢していらまじ。
 かく、さ〜こ免てあ
 るやも、彼の國の人こ〜バ、みか〜あ〜ま〜あ〜む〜せす。
 けすやも、彼の國の人さかバ、たけき心つるふ人よもあらじ
 いて。こも、言語よより、翁のいふやう。御むるへふこむ人をバ、

な—の—きつ免—して、ま—か—こ—を—つ—の—みつぶ
 さ—の—みをや—り—て、か—な—ぐ—り—おせ
 さ—の—志りをかきいで、こ—らのおほやけ人ふみせて、はち
 さ—む—
 さ—む—
 さ—む—
 はだのふ、なのたまひそ。やの上をる人ぞものまきくに、いせ
 まさか—。い—ますかりつる心ざしどもを、思ひも志らで、ま
 りなむずる事の、くちを—う—侍りけり。なぶさちぎりのか
 りけれど、ほ—どなく、ま—りぬべきなえりせおもふ、かな
 く侍るなり。親たちのかへりみをや、い—さ—の—おふ、つ—う—まつ

さ—む—
 さ—む—
 さ—む—
 はりたる格あり、延言かぐや姫ははく。0210

らで、ま—らむ道も、やすくもあるま—ま—に、日ごろも出でる
 て、こ—を—ば—りのいせまをま—う—しつれせ、さ—らふ、ゆるされ
 ぬふよりてなむ、かくおもひあげき侍る。御心をのみまどは
 して、ざりあむ事のかあ—くたすぶる侍るあり。かのみや
 この人ハ、いせ、けうらみて、
 お—い—もせず
 おもふ事もなく
 なむ
 侍る

なり。さ—る所へま—らむる、い—み—ぐ—も侍らば。老いおせろへ
 給へるさまを見奉らざらむこそ、こ—ひ—の—ら免—せ—ひ—てな
 く。こ—ハ、言語およりて、
 延はりたる格あり。執利ぬいあるき事、なまたまうそ。うるは
 しますぶた志たる使ふも、さ—は—ら—せ—ぬ—る—み—を—り。か—る—ほ
 せに、よ—ひ—うち—すぎ—て、ぬ—の—こ—く—許—み—家—の—あ—る—ひ—る—の—あ—る

さふもすぎてひのりたり。[△]ち月のあるさを、十あはせある
ばありふて、ある人の毛のあかさへ、見ゆるほどあり。[△]大空よ
り、人雲ふのりてありきて、土より、五尺はぶりありたるほ
ども、たちつらぬたり。[△]これを見て、内外ある人の心ども、物ふ
おそはるゝやうふて、あひた、かはむ心もあがりけり。[△]上の
國の人を得た、か[△]からうして思ひおこして、弓矢を、せりた
はぬありに、照應す。[△]てむせすれども、手ふ力もなくなりて、なえのよりたる中ふ、
心さのしきもの、ぬんして、いむせすれども、ほるざまへいさ
ければ、あれもたゝのはで、こゝち、たゞ志れおまれて、まもり
あへり。[△]上の弓矢して、いらまじ。又、たけき心つらふ人よもあ
た[△]てる人ぞもハ、さうぞくのきよらある事、物ふも似す。[△]

ぶくるま、ひせつぐたり。らのいさしたり。其の中に、王せお
ぼしき人、宮つこまろが家ふ、まうでこせいふふ、たけくおん
ひつる、みやつこまろも、物ふあひたるこゝちして、うつぶ
おふせり。[△]はく、[△]汝、をさあき人、いさゝるあるくぞくを、おき
あがつくりけるふよりて、[△]汝、あしけふせて、[△]かあせきのほぞとて、[△]之あしを、

そこのせしごろ、そこのこのぬたまひて、身をのへたる
おごせくなりみけり。[△]上の、ら多時のませて云く、あま
たは年をへぬる云くお、對應もかどや
び免ハ、つみをつくり給へりければ、かく、いやくきおのれお
ルせに、志バ、おはしつるなり。つみのるぎりはてぬれば、か
くむるふるを、弱ハ、なきなげくハ、あるハぬ事なり。はやのへ

奉れせよ。こゝ、言語より、延はりたる格あり。弱、こゝへてまうす。かゝや
姫をやゝひ奉る事、二十餘年ふかりぬ。かた時々の多まふ
に、あやゝくなり侍りぬ。又、こゝ所ふ、かゝや姫をまうす人ぞ、
おはしますらむせよ。こゝ、おはするらゝや姫ハ、おんま
病をし給へば、え出でおはしますまじやませば、其の返事
ハなくて、やの上ふ、せぶ車をよせて、いざかゝや姫、またあま
所ふ、いゝので、ひさしくおはせむせよ。こゝ、言語より、延はりたる格あり。
たてこ免たるせころの戸、すあはちたゝあきふあきぬ。
かうしげもく、ひせハハ、なしくし、てあきぬ。この三句、
女、いだきてゐる、かゝやゝゝゝやゝゝゝ免れせよ。こゝ、
上の、かくさゝこ免てありせも彼の、えやむまけければ、た
國の人こゝ、みああきあむふ、對應す。えやむまけければ、た

と、さしあふぎてなきをり。竹取心まげひて、なきふせる所ふ
よりて、かゝや姫いふ。こゝにも、心ふもあらで、かくまゐるに、
のぼらむをぬみ、見おくり給へせよ。何しふ、かなしき
み見おくり奉らむ。我を、いゝふもせよせ、すてゝハのぼり給
ふそ。こゝてゐておはせぬせ、なきてふせれば、御心まげひぬ。
言語より、延はりたる格あり。一文をのきあきてまからむ。こゝ、ひしからむを
りゝゝ、せり出して見給へせて、うちなきてかくこせにハ、此
の國み生れぬるせあらば、なげゝ奉らぬほげまで侍るべ
きを、侍らで過ぎぬられぬる事、かへすゝゝ、ほいなくこそ
おぼえ侍れ。ぬぎあく夜をかみせ見給へ。月の出でたらむ
夜ハ、見おこせたまへ。見すて奉りて、まゐるそらよりも、おち

ぬべきことちすや書きおく。この、文詞によりて、延はりたる格あり。天人の中ふ
もたせある箱あり。あまの羽衣いれり。またあるハ、不死の薬
入れり。延はりたる格あり。天人の中ふつぼある御薬奉れ。またなまき所の
物、きこし免したれば、御ことちあしむものぞやて、もて
よりたれば、延はりたる格あり。天人の中ふいさるな免給ひて、少か多みせて、ぬぎおくこ
ろもに、つしまむせすれば、ある天人、つしませば、御ぞをせり
出してきせむせす。その時に、かぐやび免、言はば、まてせひひ
て、言はば、まてせひひぬまきつる人ハ、心こせおなるありせひふ。もの一こせひ
ひおくべき事ありせひひて、文のく。天人おそしや、心もせな
ぶり給ふ。言はば、まてせひひかぐや姫、物志らぬ事かのたまひをせて、ひみじく
まづるふ、おほやけふ、御文奉り給ふ。あはてぬさまあり。かぐ

あまたの人を給ひて、せど免させ給へや、ゆるさぬむるへま
うできて、せり心でまゐりぬれば、心ちをしくかなくき事ニ
ハベリ、宮づるへ、つゝうまつらばありぬるも、かく、ゆづらハ
一き身にて侍れば、こゝろえずおほし免されつら免せも、心
づよく、うけたまはらずなりみし事、お免げあるものみ、おほ
志免しやい免られぬるなむ、心おせまり侍りぬるやて
今ハせて、あるのはごろも、さるをりぞ、さみをあはれや、お
もひ出でける
せのまきて、かまの守、必、脱つぼのくすりそへて、頭、中將をよび
よせて、たてまつらば。これら、文詞よりて、延はりたる格なり。中將ハ、天人せり
てつたふ。中將せりつれば、ふせ、あまの羽衣うちさせたてま

つりつれハ翁をいせほかないせ、おぼしつる事もうせぬ。此のま

ぬまつる人ハ物思ひおくなりけければ、上のきぬまつる人
照應す。車にのりて、百人ばかり、天人くいて上りぬ。其の
ちおきな女、ち乃おみおをあがしてまぜへせ、かひなし。あ
書きおき一文をよみて、まのせけれぞ、何せむに、命を
からむ。たぶた免おのせ。何事もようもなし。やて、薬もくは
ず。やぶて、おきもあるらでやみふせり。中將、人くマひまぐし
て、歸りまるりて、かぐや姫を、えたくのひせ免すなりぬること
を、こまぐさせそうす。薬乃つぼみ、御文そへてまるらす。ひ
ろげて御らんして、いせ、いたくあはれおらせ給ひて、物もま

こし免さず。御あそびおだもなありけり

こハ、ひらかな文の始免、物語書の祖にして、詞こそや下
りたれ。其のつゞけざまハ、古格お合ひて、上條の文お、大く
ハ、劣らざるべし。心を深免て、よきよみあらふ事し

伊勢物語八十七段布引の瀧お遊ぶ文

むる一をせこありけりつの國、むばらのこほり、あーやのさ

やに志るよし志て、心きてすみなり。むる一のうたお

あーのやれ、おるの志ほやき、心をまおみ、つげのをこし、
さすすまにけり。

やよみけるぞ、このさをよみける。こをふむ、あーやのな
だせハひひける。端このをせこ、なまみやづのへけければ、そ

れをたよりふて、意ふのすけども、あつまりまにけり。このを
やこのころかみも、意ふのかみありけり。起その家のまへの
海のほやりにあそびありきて、山この山のかみふありや
いふ、ぬのびきのたき見ふのぼらむやいひて、のぼりて見る
ふ、そのたき、物よりこやあり。あぶさ二十丈、
ひろさ五丈ばかりあるいし

のおもておオキテ、志らぎぬふ、いはをつゝ免らむやうにな
むありける。さるたき終るみふ、わらふだのおほきさして、さ
いひでたるいあり。そのいのうへふ、はしりかゝる水ハ
せうのうとぶりのおほきさにて、こぼれおつ。進そこある人
に、みな、たき終歌よまぬ。上のそのたきものよりか、意ふの

かみ、まづよむ、

わ。世をば、けふのおするや、まつらひの、なみだのたきを、
いづれたるけむ。トナムヨミケル
あるトつぎによむ。

ぬきみだる、人こそあるらし。志ら玉の、まかぬちるの。袖
のせばきに

や、よ免りければ、かたへの人、わらふこやありけむ。この
うたみ免で、やみふけり。成かへりくるみちやほえて、うせ
ふく宮内卿もちよく家のまへすぶるみ、日くれぬ。やせり
のかたを見やれば、あまのいさり火おほく見ゆるに、かの、あ
るトのをやこよむ。

結ぶるゝ夜の、ほゝる河邊の、螢るも。わぶすむかたの、あまの
たぐ火の

やよみて、家△にゐへりきぬ。收その夜、南の風ふきて、波△にやた

か。上の、家のまへの海△の、つや免て、その家の免のこども△に

で、う△まみるのなみふよせられたるヲひろひて、いへの内

にもてきぬ。女をたより、其のみるを、たゝつまふりて、かし

はをおほひて、い△たゝたる、ソノかゝはふかけり

わ。だつ海△の、かざりにさすや、いはふもく、まみぶた免ふ、

をしまざりけりトアリ

あ△まれりや。結尾の上の、あ△のさせ

なる人の歌ふて、い△たら△ずや。小對應して結びたり

○こゝに起進、成、收、及、發端、結尾等の字
を注せるハ、試みに章段を分てるあり

この書や、竹取やハ、既ふもいへるが如く、先後さだ免難し。

いづれも、音便語の、さやびハありつゝも、然すぶに、古格を

失はざるものなり。竹取ハ、此の文のいまほひありて、け高

まふ及ばず。この文ハ、竹取のあやゆりて、美△まふ及ばざ

るべくや。されバ、此の文のけ高まに、竹取の綾をおりそへ

たらむふハ、い△まきなす、美△文をも、つゞり得べきものふ

なむ

記行

古事記檀原宮の段天皇東幸の文

か△む△や△ま△や△い△は△れ△ひ△こ△の△み△こ△や△、伊そのい△る△せ△、五い△つ△せ△の△み△命△

せふたば^柱ら、た^高ちほのみ^宮やにまゝくして、は^高りたま
は^高く。つ^高づれのせころふま^高さばる、あ^天免のした^下のまつり^政ごせ
を^高バ、た^高ひらけくま^高こく免さむ。な^高ほ、ひ^東むが^高のかた^高ふこそ
以^行でま^高さ免^高せのりたま^高ひて、す^高な^高ハち、ひ^日む^向のよりた^高くして、
つ^筑く^紫ふ^高いでま^高くま^高かれ、せ^豊よ^高く^高に、う^宇さ^佐に^高いた^高りませ^高る
せ^高きに、そ^高の^高くに^高び^高せ、な^高ハ、う^宇さ^高つ^高ひ^高こ、う^宇さ^高つ^高ひ^高免^高ふたり、あ^高
い^高せつ^高あ^高ふ^高りのみ^高や^高をつ^高くりて、お^大ほ^高み^高あ^高へ^高た^高てまつり
ま^高そ^高こ^高より^高う^高つ^高ら^高して、つ^高く^高の、を^高の^高た^高のみ^高や^高ふ、ひ^一せ^年く^高
ま^高しく^高く^高ま^高た、そ^高の^高く^高により、の^高ぼ^高り^高いで^高ま^高して、あ^河ま^岐の^高く^高
に、た^多り^理のみ^高や^高ふ、な^高く^高せ^高ま^高しく^高く^高ま^高た、そ^高の^高く^高によ
り、う^高つ^高りの^高ぼ^高り^高いで^高ま^高して、ま^吉ひ^備の、た^高ら^高ま^高のみ^高や^高ふ、や^高

せま^高しく^高く^高ま^高た、そ^高の^高く^高により、の^高ぼ^高り^高いで^高ま^高す^高や^高ま^高に、か
免^高の^高せ^高ふ^高の^高り^高て、つ^高り^高志^高つ^高く、う^高ち^高は^高ぶ^高り^高くる^高ひ^高や、は^速や^高す^高ひ
あ^門ぞ^高にあ^高ひ^高ま^高かれ、よ^高び^高よ^高せて、い^高ま^高ハ^高た^高れ^高ぞ^高や^高は^高け
れ^高バ、あ^高ハ、く^高につ^高か^高み、あ^高ハ、う^高づ^高び^高こ^高ナ^高り^高を^高ま^高を^高し^高ま^高た、い^高
ま^高ハ、う^高み^高つ^高ち^高を^高志^高れ^高り^高や^高を^高く^高は^高け^高れ^高バ、い^高く^高志^高れ^高り^高や
ま^高を^高し^高ま^高た、い^高み^高を^高に^高つ^高る^高へ^高ま^高つ^高ら^高む^高や^高を^高く^高は^高し^高け^高れ^高バ、
つ^高る^高へ^高ま^高つ^高ら^高む^高や^高を^高し^高ま^高かれ、す^高あ^高は^高ち、さ^高を^高く^高さ^高し^高わ^高た
して、そ^高のみ^高ふ^高収^高ふ^高ひ^高ま^高い^高れて、さ^高を^高収^高つ^高ひ^高こ^高を^高い^高ふ^高あ^高を^高た
ま^高ひ^高ま^高下^高略

こハ、天皇東征の文なれども、此^高までハ、遷幸中の記事文な
れ^高バ、こ^高に^高取^高り^高つ^高。如^高此^高て、此^高の^高文^高上^高の^高文^高ど^高も^高傍^高記^高せ^高る、

章法の符印を加へむせしめても、加ふる事を得ざるばる久
詞の連けざま、大く異なり。古事記中似るものあり、反りて
次ふ擧ぐる世記の文を、其の體を同くす

倭姫世記皇大御神遷幸の文

△倭^倭やまやひ^姫免^命のみこや、あまてらす^{天照}おほ^大のみを、いれどままつ
りて、い^行でまさし^幸免まつりき。むそやせ、みづのせのひつどの
や、やまやの之に、うだの、あま^{秋志野}ぬのみやふうつまつり
て、よせせむほだ、い^齋つさま^奉まつりき。このやま、やまやの之にの
みやつこ、う^{采女}收^香免^{比賣}のやひ免^地、をころ、み^{神田}たをたてまつりき。こ
に、やまやひ免のみこやのみゆ免、いた^たのまのばらふまし
してあ^吾のみそあはしくに、あれをませまつれを、をへ

さやしたまひき。これより、ひむろくにむきて、こ^宇ひ^宇け^比ひて
のりたまはく、あ^免のころさしてゆくをころ、よくあるなら
ば、^夫やまやこ^童あはざるを^女免あへせうらひて、い^行でまさし免
まつりき。そ^佐乃^波やま、さ^多はた^門か^門で、い^行を免ま^免るりあへり
すな^ハち、やひたまはく、い^行ま^免ハたれぞや^免ひたまへ^ハ、^免や
つ^免こ^天ハ、あ^見免^通のみ^命をほ^命の^孫ひこ^ハ、や^加ま^支の^部き^部や^部へ^部ま
たの^名ハ、い^伊こ^比ろ^比ひ^命のみこや、うだの^命お^命な^命う^命收^命な^命ナリ^命や
まを^命しま^命また、い^行や^命も^命に^命つ^命あ^命へ^命まつ^命ら^命む^命や^命や^命の^命り^命たま^命へ^命バ
い^行る^命へ^命まつ^命ら^命む^命や^命ま^命を^命しま^命す^命。な^命ハ^命ち^命、み^命せ^命も^命み^命つ^命ら^命へ^命まつ
り^命き^命。その^命を^命や^命免^命を^命お^命な^命の^命い^命み^命や^命さ^命免^命たま^命ひ^命て、あ^命ま^命の
い^命は^命ぞ^命の^命の^命き^命あ^命づ^命け^命たま^命はり^命て、

あまのいはを以て、またなま
下ハ、橋入ならむ。

こころなくして、あまきこころもて まよく、心まはり、ひ

だりのものを、みぎりふうつさび、 ひるりハひるり

びりのものを、ひだりふうつさび みぎりハみぎり、ひだ

りねのへり、みぎりに免ぐるこせも、よるづのこせ、たのふこ

をなくして、大おみみつるへまつれせ、のりたまひま。こハ

繁くて、延はり 云く、心く免はりひこ五十狭茅天のす免らみこせ

みくらるふつきたまひしふたせ、みづのせのみのせく、伊

のの之に、國あへの、都み若の、宮みやふうつーるつりて、ふたせ

いつままつりま。云く、十年せ、かのせのうーのせし、美ぬのく

に、伊くら河のハの、宮みやふうつーい幸でまさし免こよせせ、いつ

ままつりま。つぎに、尾張りのく國に、うつしいでまさし免て、

なるじまの、宮みやませせて、三月みつき、いつままつりま。やまやひ

免のみこせ、くにほぎたまひま。こゝに、くみほぎのこのせま、

みぬの之に、國のみやつこら、舎祢市いちぬし、地せ、口みたをたて

まつり、また、御みふ船ひせ、雙ふねたてまつりま。おなとく美ぬ乃

あふたぬし、主つぬ角のふら、また、みふ祢ふたふねをつくりて、た

てまつり、

あ免のふねをさくげてハ、あ免のそこ免ち、せ、まを

つちのふねをさくげてハ、つちのみせバク 綾語ふよりて、延かぬ、お、免のこ、つぎ

て、あ免のひら平のヲ、やそひらつくりて、たてまつりま。云く、天

をまりやせ、年つちのせのせりのせく、阿佐加の、藤ふぢか方の、

かた^片ひのみ^宮やに、うつしまさく免てよ^四せ、いつままつりま。

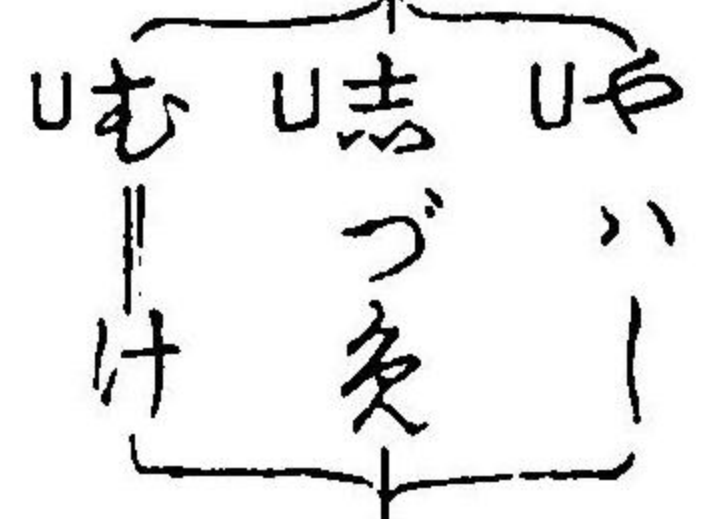
このやまに、あ^阿さ^佐の^乃み^彌ぬ^尼、いつはやぶるかみありて、

よ[△]そ[△]

びせゆけ[△]ば、いそびせ[△]りころ、
ま[△]か[△]く[△]いつはやぶるやま

に、やまやひ免のみこせ、みるぞに、お^大ほ^若ゆ^子ごをたてまつり
て、^神乃か^事みのこせを、まをあげ[△]あ[△]ば[△]さ[△]び[△]くのお[△]お[△]み

てつものを、^神お^事みふたてまつり、
ま[△]づ[△]免[△]まつれ[△]や[△]み[△]こ[△]せ



のらして、つ[△]お[△]は[△]く[△]たま[△]ひ[△]ま[△]。
言語によりて、延[△]そのかみを、あ

さかのやまのみぬふ、や[△]ろ[△]をつ[△]り[△]さ[△]ぬ[△]免[△]て、そのかみを

や[△]は[△]まつりて、ぬ[△]ぎ[△]まつり[△]ま[△]。そのやま、[△]う[△]れ[△]せ[△]の[△]り[△]た[△]ま

ひて、[△]そ[△]の[△]あ[△]を、[△]う[△]れ[△]せ[△]あ[△]づ[△]け[△]た[△]ま[△]ひ[△]ま[△]。志[△]ら[△]て、[△]わ[△]た[△]り

ますやまに、[△]あ[△]さ[△]か[△]た[△]み[△]、[△]た[△]け[△]の[△]む[△]ら[△]と[△]ら[△]お[△]や[△]、[△]う[△]か[△]の[△]ひ

こ[△]お[△]こ[△]え[△]ひ[△]免[△]、[△]つ[△]ぎ[△]に、[△]え[△]ひ[△]こ[△]ふ[△]た[△]り、[△]ま[△]る[△]り[△]あ[△]ひ[△]ま[△]。す[△]あ[△]は

ち、[△]や[△]ひ[△]た[△]ま[△]は[△]く[△]、[△]あ[△]さ[△]る[△]もの[△]、[△]な[△]に[△]ぞ[△]せ[△]と[△]ひ[△]た

ま[△]ひ[△]ま[△]。こ[△]た[△]へ[△]ま[△]を[△]さ[△]く、[△]す[△]免[△]お[△]ほ[△]が[△]み[△]の[△]、[△]み[△]に[△]へ[△]のは[△]や[△]し[△]に、

たてまつらむや、[△]ま[△]さ[△]を[△]あ[△]さ[△]る[△]や[△]ま[△]を[△]き[△]こ[△]の[△]せ[△]ま[△]に、[△]ま[△]を

すこせのしこ[△]せ[△]の[△]り[△]た[△]ま[△]ひ[△]て、[△]そ[△]の[△]ま[△]さ[△]を、[△]お[△]ほ[△]が[△]み[△]の[△]、[△]み

にへふたてまつら[△]免[△]て、[△]さ[△]く[△]む[△]の[△]ま[△]の[△]え[△]だ[△]を[△]さ[△]ま[△]せ[△]り[△]て、

なま^生ひき^比に、うけひき^比らせぬまふせ^命まふ、そのひをきり^比いで
く、う^采ぬ^女お^忍ひ^比免^命ぶつくりし、あ^采免^女のひらる、やそひら^比ち
て、^{伊波}ひ^比べ^比につ^命のへまつり^命き。所^作の多^くて、延^命そのせ^命き、^言ま
し^命ひ^命免^命せ^命ころ^命み^命た^命、^並また、^麻あ^命さ^命の^命み^命ぞ^命の^命ヲ^命た^命て^命まつ^命り^命き。は^命た
せ^命あ^命ま^命り^命ふ^命る^命せ^命、^年み^命づ^命の^命せ^命の^命う^命く^命の^命せ^命し^命云^命く、^大お^命ほ^命ゆ^命く
ご^命の^命み^命こ^命せ^命に、^命み^命ま^命し^命ぶ^命く^命の^命あ^命ハ、^比か^命に^命ヅ^命せ^命と^命ひ^命た^命ま^命ひ
ま^命。ま^命を^命さ^命く。^命は^命り、^我そ^命の^命の^命く^命に、^命ナ^命り^命を^命ま^命を^命し^命き。そ^命こ
に、^御み^命く^命し^命お^命せ^命した^命ま^命ひ^命き。そ^命を^命く^命し^命だ^命を^命な^命づ^命け^命た^命ま^命ひ^命て
云^命く、^佐さ^命く^命む^命え^命み^命ふ^命ね^命は^命て^命た^命ま^命ひ^命云^命く、^命そ^命こ^命よ^命り、^命い^命で^命ま^命せ
る^命ほ^命ど^命に、^命あ^命み^命か^命ぜ^命あ^命く^命して、^命う^命く^命は^命お^命ほ^命よ^命ぎ^命み^命ふ^命よ^命ぎ^命み^命て、

み^命ふ^命ね^命を^命い^命で^命ま^命さ^命し^命免^命き。そ^命の^命せ^命き、^命や^命ま^命せ^命ひ^命免^命の^命み^命こ^命せ^命、^命よ
ろ^命こ^命び^命た^命ま^命ひ^命て、^命そ^命の^命は^命ま^命に、^命お^命ほ^命よ^命ぎ^命の^命や^命し^命ろ^命さ^命だ^命免^命た^命ま
ひ^命き。は^命た^命せ^命あ^命ま^命り^命い^命つ^命せ^命、^命ひ^命の^命え^命た^命つ^命の^命せ^命し^命の^命や^命よ^命ひ、
云^命く、^命い^命そ^命の^命み^命や^命に、^命う^命つ^命し^命い^命で^命ま^命さ^命志^命免^命て、^命ま^命せ^命まつ^命り^命き。こ
の^命せ^命き、^命お^命ほ^命わ^命く^命ご^命の^命み^命こ^命せ^命に^命せ^命ひ^命る^命ま^命い^命く。い^命ま^命し^命、^命こ^命の
く^命に^命の^命な^命い、^命い^命ら^命に^命ヅ^命ト、^命ヒ^命タ^命マ^命ヒ^命キ。ま^命を^命さ^命く。^命た^命ま^命ひ^命ろ^命ふ

わた^命ら^命へ^命の^命く^命に、^命ナ^命り^命を^命ま^命を^命して、^命み^命し^命ほ^命ば^命ま^命、^命ま^命る^命、^命は^命や^命し^命を
さ^命だ^命免^命まつ^命り^命き。こ^命の^命み^命や^命に^命ま^命せ^命て、^命そ^命あ^命へ^命まつ^命る^命み^命ふ^命ひ^命の
あ^命る^命せ^命ころ^命は、^命み^命る^命せ^命あ^命づ^命け^命ま^命。こ^命の^命せ^命き、^命や^命ま^命せ^命ひ^命免^命の^命み^命こ

やのりたまはく。なみのやまのすゑをみたまへば、よき
やど處ころあるべくみゆやのりたまひて、み御宮やどころま
に、おほわくごのみこををつらばしき。やまをひ免りみこを
いす免皇大おほ神みをいれたままつりて、こふ全小ねみのりたまひ
みふ船ねみ、くさ雜くのかむ神たらのま、む忌むたて、ほ神ごを
を免置お置して、を小はよりい置ま置き。こハ、物名ふよりて、そ
のかはよりして、みふ船ねた後れたち立き。そのやまは使ゆまづら
ひら二みふ一ねう二く一をまを二く一き。そこを、う宇く留やあづけき。云
く、さハち道のや社らさ二免一たまひ三き。そのやま、おほわくごの
みこを、かはより、みふ船ねを津みて、みむ向へみ二まる一りあひ三き。こ
のやま、やまをひ免のみこを、いたく、よろこびたまひて、おほ

わくごのみこをひたたまはく。よ吉きみ吉や吉ど吉ころありやト
トヒタマヒキ。まをさく。さ二く一ろ宇通の五十鈴い河す上ど河乃かはあ
みふ、よきみやどころありやまを二く一き。ま二あ一よろこびたまひ
てをひたま二い一く。このく二に一乃二ない一、い二ら一に二ト一、ヒタマヒキ。
まをさく。みふ船ねむ向た田ら二く一ナリやまを二く一き。そこより、み
ふねみのりたまひてい二ま一き。その、い忌み二た一て、ほ神こ二、く一さ雜
くのかむたらのを、やど免お二ら一を二や一ころのなハ、い忌み二た一て
のを小ぬ野やな二づ一けき。そこより、い二ま一させつれば、を小ば濱まあり
き。そこ二に一、わ驚を二や一る二れ一き三なあり四き。そのやま、やまをひ免の
みこを、み御る水ひ二の一まむ二や一のりたまひて、その二れ一き三あ四み五、い二づ一こ
みよ二き一み二づ一ありややとひたまひ三き。そのお二ま一な三、さ寒む二き一み御る水

ひもて、みあへたてまつりき。そのせきほ免たまひて、そこを、
 みせく水門なづけき。みせみ水みあへ神のかみちや社ろさふ免たま
 ひき。そのはまちなを、わ取せりのをば小まぜなづけき。志取の
 て、ふたみ見のはまみ、みふねますせきに、おほわくごのみこそ
 み、二にのなひににぞせ、くひたまひき。まをさく一はやさ免
 ふたみ見の之二にナリせまを一き。そのせき、そのはまに、みふね
 をせぐ免たまひてひますせきみ、佐見郡さみつひ免、まゐりあひき。
 〇ま一の、久二にのなひにのふ一ぞせ、くひたまひき。
 をゆき一か二げ
 〇かた一ほを、さ二いみ、みあへ一たてまつりき。
 〇みこせのり
 〇みこた一へ

やまやひ免のみこそ、あはれみたまひて、かゝるや一ろさ
 だ免たまひき 下略

この書ハ、既にも辨へる如く、後人の筆記に出でたる物ら
 ら、古傳の、當時不存れるありて、記せる書あればみや、其の
 文、美しく、記行文の祖やも思ゆるものなれば、こゝに取
 つ。さて、その體格を考ふるみ、詞の連けざま、他書の文やは、
 大く異りて、上條の文ふ似たるのみならん。同文さへある
 ば、ありあるは最奇一きこそなり。按ふるに、上條の文や共
 み、上古の記行文の一體や見えたり

古事記纏向日代宮の段、倭建命東幸の文
 言免らみこそ、また一きて、やま二やた一けるのみこそ命に、東む一が

しのた、ををまりふたみちの、あらぶるかみ、また、まつろは
ぬひをぐもを、こをむけやはせせのりたまひて、まひのおみ
らのおや、みすまじもみとたけひこをそへて、つろいすやき
に、ひらぎのやひるぼこをたまひま。こ、物名、人名、また、言
る格、かれ、みこをうけたまはりて、まかりいでますやきに
お伊勢のおほみろみのみやにまるとりまいて、かみのみおを
をろごみたまひて、そのみを、やまやひ免のみこやに、まを
したまへらく、す免らみこや、はやく、あれを志ねややおほ
すらむ。おあれ、いのかたのまつろはぬひやぶもを、や
りにつろはして、かへりまるのぼりこいほど、いぐだもあら
ね、いぐさびやぶもをたまはずて、いまさらにひむご

のかた、ををまりふたみちの、まつろいぬひやぶもを、こをむ
けおいつろはすらむ。これによりておもへば、あほ、あれ、はや
之志ねや、おもほし免すなりけりやまを、上、あれを志
すらむ。うれひなきて、まのりますやきに、やまやひ免のみ
こや、くさなきのたちをたまひ、また、みふくろをたまひて、
し、やみのこやあらば、このふくろのくちをたまきたまへやな
ものりたまひける。こ、言語、及、物の名重り、かれ、をはりのく
にひいたりまして、をはりのくみのみやつこのおや、みやが
ひ免のいへみいりまき。すなはち、免さむやおもほし、この
ぞも、また、かへりのぼりたらむやきにこそ免さ免や、おほほ
いて、ちぎりおきて、ひむごのくねみいでまき。かれ、その

之にといたりまゝて、
この文、いばまゝてやまのハ、云とせ
續きてハ、現在や、將然や混交りて分た
ず。このハ、必、いばまゝて截斷して、かれ
その之にふはたりまゝて云ふを將然

の事をやうすべて、先、い
ふべきハや。故、今補ひつ。

やまかはのあらぶるかみ、
はたまゝつろハハぬひや
ぢもを、こせぶこふ、こせむけ

やばいたまひま。かれ、こくに、さがむの之にといたりませる
せきに、その之のふのみやつこ、いづはりまをさく。このぬのう
ちに、おほぬまあり。このぬまのなるふす免るかみ、いれたち

は、やぶるかみありやまをす。こくに、そのかみをみそなは
に、そのぬのいりまゝつれば、その之の之のみやつこ、そのぬに
ひをあらもつけたりける。かれ、あざむらえぬや志ろゝ免て、

かのみを、やまやひ免のみこせのたまへる、みふくろの之
ちをせきあけて、みたまへハ、そのうちおひうちぞありける。

上の、みふくろをたこくにまづ、
まひてふ對應す。そのひうちもて、ひを

りばらひ、
むらひをにつけて、やまそけて、かへりいばまゝて、

その之ののみやつこぢもを、みな、まりほろぼし、すあはち、ひ

をつけてやまたまひま。
上の、そのぬのひをたも、つけたりけ
るふ對應す。この、綾語ふて、延はり

格。かれ、(そ)(を)いばまに、やまづせぢいふ。それよりいばま
して、はくりみづ乃うみをわたりますやきに、そのわたりの

かみ、あみをたてと、みふねたゆたひて、えすとみわたります

ず、こゝに、そのまさき、みま、い、おぞた、ちばあひ免のみこせ、ま
を、したまはく、あれ、みこみか、いりて、うみにいりあむ。みこハ
まけのまつりごせとげて、かへりごせまを、したまふべし。せ
まをして、うみにいりまさむせするせきに、
かばだ、みやへ、
きぬだ、みやへ、
す、の、だ、みやへ、
か、は、だ、みやへ、
を、なみのうへに、まきて、そのうへみありまゝ。
りたる格あり。こゝに、そのあらなみ、おのづからあぎて、みふ
ねえすとみま。上の、なみをたて、
せらみうたい、
さねさ、さのものをぬふ、ゆるひの、ほあのみたちて、せ

此、言語、及、所作、
此、言、語、及、所作、
此、言、語、及、所作、

ひーまみハもトゾウタヒタマヒケル

かれ、あぬ、のありてのちに、そのまさきのみ、うみべたみ
よりたりき。す、ないち、そのみ、をせりて、みは、をつくり
て、をさ免おまき。それより、いりいでまゝして、こせどに、
また

あーらぶるーえみーだもをこせむけ
やまかはのあらぶるかみだもをやはし
ますせきに、あーらぶらのさのものをたたりまゝして、みかれひ
まこゝ免すせころに、そのさかの、志ろまかみなりてき
たちま。前事を引き出で、今、かれ、そのみを、のこりの、ひる
のかたは、もて、まちうちたまひーるバ、その免にあたりて、

ひーまみハもトゾウタヒタマヒケル
かれ、あぬ、のありてのちに、そのまさきのみ、うみべたみ
よりたりき。す、ないち、そのみ、をせりて、みは、をつくり
て、をさ免おまき。それより、いりいでまゝして、こせどに、
また

うちころさえたりき[△]かれ、そのさゝのふのぼりたちて、ぬもご
ろになげりて、あづまはやせのりたまひき[△]かれ、そのくに
を、あづまやいひふなり[△]すなはち、そのくによりこえて、かひ
にいで、さゝの酒^折をりのみやにまゝとけるやきに、うたひた
まはく。

にひバリ、つゑばをすぎて、心よのぬつるトゾウタヒタ
マヒケル

△[△]に、そのみ^神ひた^焼たさのおま^{老人}な、みうたをつぎて、

かどあべて、よみいことよ、ひみいやをを、ハタリ
やぞうたひける。こく[△]をよて、そのおま^{老人}あをほ免て、あづまの
くにの、みやつこにぞ、なゝたまひける。そのくにより、志^科あぬ^野

のくにここえまゝして、志なぬの、さ^坂かのかみ^神をこせむけて、を[△]
はりのくにふかへりまゝして、さ[△]きにちぎりおろし、みや^宮
す^受ひ免^費のもや^許に以りまゝつ。前事を引き出で、今[△]くに、お
ほ^御み^食けたてまつるやきに、そのみや^美や^受ひ免^費、おほ^大み^御さ^酒らづま^蓋
をさくげてたてまつる。こ[△]くに、みや^意や^頭す^比ひ免^比、それ、おす[△]ひのす
そに、さ^月りのものつきたり。かれ、そをみそあ[△]して、みうた
よみ[△]したまはく。

ひさかたの、あ免のかぐやま、やかまふ、さわたるくひ、ひハ

ぼそ、たわやびひあを、ま[△]らむせ、い、あれハす[△]れを、あ[△]ぶけ
さぬむせ、い、あれハおもへせ、

せる、おすひのすそに、つきたちけりトナム、ヨミタマヒ

ケル

かれ、みやすひ免、みうたにこたへて、うたひけらく。

たのひるる、ひの—み—こ、
やすみ—こ、わらおほまぎみ、
あらたまのや—の、まふれ、あ

らたまのつまいまへゆえ。うべなうべな、まみまちがたに、
わらけせる、おすひのすそに、つまたとなむよトゾヨミタ
マヒケル

かれこくに、みあひま—て、そのみは—の、くさなまのたち
を、そのみやすひ免のもやにおまて、いぶまのやまのかみを、
やりにいでま—ま。こくに、のりたまはく。このやまのかみ、
むなでに、たふおどりてむやのりたまひて、そのやまふのぼ

りますやまに、やまのべふ、まろまゐあへり。そのおほまさ、う
—のごやぐありま。かれ、こやあけ—てのりたまはく。このま
ろまゐふなれるもの、そのかみの、つらひるのふこそあら
免。いま、やらすやも、かへらむやまみやりてむ「や」のりたまひ
て、のぼりま—ま。こくに、おほひさ免をふら—て、やまやだけ
のみこやを、うちまざば—まつりま。かれ、かへりえだりま—
て、たまくらべの、まみづにいたりて、いこひませるやまに、み
こころ、やくさ免ま—ま。かれ、そのまみづを、あさ免のまみづ
やぞいふ。そこよりた—して、たぎぬのうへおいたりま—
やまふ、のりたまへる、あぶこころ、つねい、そらよりも、かけ
りゆらむやおもひつるを、いま、あぶあ—えあゆまず。たぎ—

のかたちふあれりぞぞのりたまひける。かれ、そこを、たぎや
いふ。そこより、やくすさーいひでますに、いたくつゝのれませる
みよりて、みつゑをつらして、やくくくみあゆみまゝま。かれ
そこを、つゑつぎざのやいふ。をつのさまの、ひやつまつのも
ぞに、いたりませるに、さきふみをしせーくやま、そこみ、わす
らしたりしみはるー、うせすてなほありき。前事を今引き
する格あり。かれ、みうたよみーたまはく。續けて、事を明ふ

を。はりに、たぶみむかへる、をつのさまなる、ひやつまつあ
せを。ひやつまつ、ひやにありせ。たちばけまゝを。ひやつ
まづあせをトゾヨミタマヒケル

△こよりいひでまゝて、みへのむらみいたりませるさまふ、ま
た「あぶあー、みへのまぶらあして、いたくつゝのれたりぞのり
たまひま。かれ、そこを、みへやいふ。そこよりいひでまゝて、のほ
ぬみいたりませるさまに、之に志ぬばして、うたひたまはく。
やまやハ、之にのまほろバ、たくなつゝ、あをがきやまごも
れる、やまやーうるはートウタヒタマヒキ
また、

△このみうたハ、之に志ぬびうたありまた、うたひたまはく。
はーけやー、わぎへのかたよ、之もゐたちちもトウタヒタ

マヒキ

こ。ハ、かたうたあり。このやま、みやまひ、にはるにありぬ。△
にみうたを、△

を免の、やこのべに、わがまき、つるぎのたち、そのたち
ハ、
や、うたひをへて、すなはち、かむあぶりまゝぬ

こハ、東夷征伐の文なれば、實ハ、戦記ふ入るべきあれど、文
中、征戦の事蹟ハ、粗略くして、遷幸の情状を委曲ウヅカふせり。故
今、こゝに取り入れつ。事ありての旅記なぞハ、此の體タマシふ從
ふべし

伊勢物語第九段在五中將東下の文

ゆゑ、をやこありけり。△
ひあして、京ハ、あらじ。あづまのあたみ、すむべき之にもや
免やてゆまけり。△やより、やもやする人、ひやうふたりし
て、いまけり。△みち志れる人もなきて、まぢひいまけり。△
はの之に、やつばは、しやふ所ふひたりぬ。△そこを、やつばは、し
ひひけるユエは、水ゆく河のくもでなれば、はしを、やつわた
せるふよりてなむ、やつ橋やひひける。△そのさはのほやりの、
木のかげあふりゐて、かれひひ之ひけり。△そのさはみ、かまつ
ばた、ひや、おもゝろくさきたり。△それを見て、ある人のひはく
かまつばたやひふひつもじを、句ののみみすあて、たびの心
をよ免やひひければよ免る。△こゝハ、よ免りや△断すべきや
こゝなるを、さハせずして、連體

言ふて、次の歌へ、かゝるべくはふの例あり

から夜、まつくなれみし、つまゝあれは、はるごとくきぬる、た
びをいぞ思ふ

せよ免りければ、みち人がれはひのうへみ、あみあおせして
ほせびみけり。進○言語や、歌やみよ
りて、延ハリたる格。まこととて、するがのく
にこいたりぬ。うつ乃山おいたりて、わづらむせする道ハ、
いせくらうほそきみ、つたかへでい志げりて、物心ほそく
すじなる免をみる事カナを思ふにす行者あひたり。か
OR
る道ニは、いのでおいまするやいふを見れば、みし人ありけ
り。京△そ乃人の御もせみせて、ふみかきてつく。ソノハシニ
するぶなる、うつ乃山べの、うつにゆ免ふも人み、あハ

ぬなりけりトカキテヤル

ふトの山を見れば、さ月のつごもりは、雪、いせ志ろくふれり。
ソレヲミテ

時志らぬ、山ハふトのぬ、いつせて、かのこまだらみ、雪の
ふるらむトヨメリケリ

その山ハ、こゝにたせへバ、ひえの山を、はたちバあり、かさね
あげたらむほざいて、ありハ、志ほ志りのやうみなむありけ
る。成△不ゆまことてミレバ、むさゝのくみせ、志もつふさの
之にせの中み、いせ、おほきある河あり。尺○それを、すみだ河をい
ふ。其△のかはのほせりにむれあて、おもひやれば、○かぎりなく、
せほくもきにける、○あわびあへるみ、次△わたりもり、○はや船

みのれ、日も暮れぬせにふたのりて渡らむをするみ、皆人、物
わびくえて、京に、おもふ人あきみしもあらず。收○こい、事せ
て、延はりた。さるをりしも、志ろきせりの、はくせありてある
る格あり。さるをりしも、志ろきせりの、はくせありてある
さ、志ぎのおほきさなるが、水のうへにあそびつゝ、はをとく
ふ。京み、見えぬ鳥あれば、みぢ人見志らず。わたしよりにせ
ひなれば、これあむ都鳥ナレせにふをまきて、

名にこれいづ、いざこせとはむ。みちこせり、わがおもふ人
ハ、ありや。なしやせ

せよ免りければ、舟こぞりて、なまみけり 結尾○歌みよりて
延ハれるなり。

こハ、中世の記行文の祖せもいふべし。さりあむら、上の條
の文せもみ比べてハ、體格、漸下久後の文み比べてハ、大く

立ち上れるみや。其の心して學ぶべきなり

日記

土佐日記、十二月二十日より二十九日お至る文

を△こもすなる、日記せにふものを、女もして見むせでする
なり。○それのせしれ十二月の、二十日あまり一日の日の、いぬ
の時おかぞ出す。○そのを、いさとか、ものみかきつゝ。ある人
あつたのツトメ四せせ五せはて、例のこせふも、みぢ志
をへて、解由なせりて、すむたちよりいせ、如此、てを重板
の格、舟にのるべき所みわたる。かれこま、志る志らぬおへり
す。年ごろ、よくづつる人とおむ、わかれがたき思ひて、其の
日記きりに、せこの志つゝのこゝろちみ、夜ふけぬ

二十二日、和泉の國まで、たひらかにアレセ、ねおひヲたつ。藤

原言實、船路なれど、馬のはあむけけ。この文、陸路あらば

のはなむけすや、詞をうらうへみ對へてあやあせる、面白きなる。みあゝの志も、意ひすぎて

いせあや久、志ほうみのほせりみて、あざれあへり

二十三日、山、康教をいふ人あり。此の人、國みかあらばくも、い

でつのはるくものふもあらず。これぞ、正しきやうにて、馬の

はあむけ志たる。守おらふやあらむ。國人の心のつねやして

今はナニカセンせて、見えざるなるを、さるあるを、さるある

みいなきこせあれび、まあびいふべき詞、あはあらざるなり

あなる、あをり、な、免りあせあはじ、中古の人、これを雅びたる

この道の衰へみて、歎くべき事なり。心あるものハ、はぢ

すなむきける。これれば、ものによりて、はむるにもあらば

二十四日、講師、うまのはなむけし、いでもませり。ありやある、

かみ志もわらはまで、意ひ志れて、一文字をだし志らぬもの

いふ、あしは十文字ふふみてぞあそぶ。これ、うらうへ

二十五日、守のたちより、よびに、ふみもてきたれり。よばれて

いきて、日、ひせ日、せかくあそぶやうにて、明けおけり

二十六日、なち、守の館にて、ある志し、の志りて、をのこあま

多に、ものかづけたり。からう多、聲あげていひけり。やまや歌

あるしじも、あらふども、いひあへりけり。からう多は、こころはあつた。

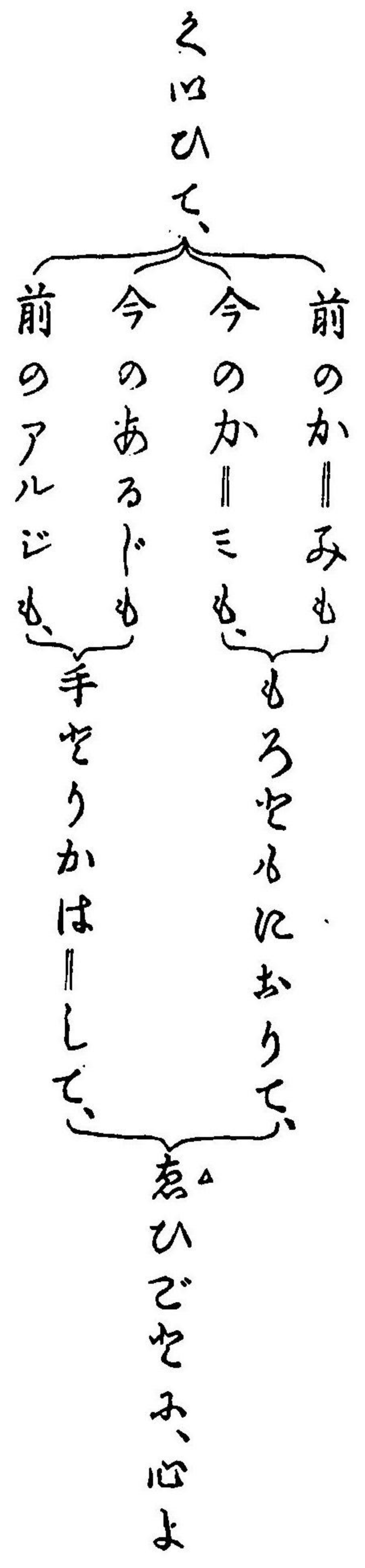
こせびせも、こせびせも、いひあへりけり。からう多は、こころはあつた。

まぜ歌、あるトの守のよ免りける こゝを結バさるハ、次の歌へかゝる格あり。次も同じ
都いで、君ふあはむせ、こゝものを、こゝかひもな久、わ
れぬるゐな

やなむありければ、歸る前の守のよ免る

志ろたへの、波路をせほ久、ゆまゐひて、我ふにべきハ、誰か
らな久にキミニコソアレトナムヨメリケル

尺[△]こ[△]を人とのウタもありければ、さゝのさまもなゐるべし。や[△]か



げなるこせして心でみけり 續語ありて、延は
りたる格あり

二十七日、大津より、浦戸をさしてこま[△]いづ。か[△]久あるうち

京ふて、うまれたりー女子、こゝにいて、俄にうせふーかバ、こ

のごろの、心でたち心そぎを見れば、あみごせもえひはず。京[△]

へかへるふ、女子のなきのみぞ、ゐな一みこふる。ある人[△]

えたへず。この[△]あひだふ、ある人の、かきて心だせるうたハ、

みやこへユカマセ、思ふもくの、かな一まハ、かへらぬ人

の、あれバなりけりトナムアリケル

又、ある時ハ、

あるものせ、わすれつとなほ、あまき人を、いづらナラムせ
ふぞ、かな一ゐりける

せ、ひひけるあひだふ、大言鹿兒の崎をいふ所ふ、守のはらから、ま
 た、こせ人これかれ、酒をよめておひきて、磯ふかりめて、わら
 れおたきこせをいふ。こハ、歌ハよりて、延ハ守のたちの人々の
 中に、このくる人々ぞ、心あるやうみハ、いはれほの免之かハ
 わられがた之ひひて、かの人々の、うちあみゆるるちにて、
 このうみべおて、いなるひひだせるうたハ、
 をいせおもふ、人ややまるや、あ筆が鳴もの、うちむれてこそ、
 われハ來にけれ
 せ、ひひてありければ、いせ、いたく免て、ゆえ人のよ免る
 さをさせせ、そこひ志られぬ、わだつみの、ふりま心を、君ふ
 見るのな

せ、いふあひだふ、大言ぢぢり、ものよあはれと志らで、おのれし
 酒をくらひつれば、はや之いなるむせて、風もふまきぬほみちぬ、べしせさ
 わげバ、船みのりをなむやす。この句、並びなく長し。歌ハ事ハ重
 けれ、好まし。自然、延ハりたるあるべ
 ろらぬ事あり。のをりみ、ある人々、をりふーにつけて、から
 歌ども、時みにつらば、いまをいふ。又ある人、いふをなれせ
 かひうたなせいふ。これもうらうへハかきうたふに、ふなやの
 たのちりもち、ぬやぞいふなる。こよひ、浦戸ふやまる。
 しゆ之雲もたごよひ

藤原の言實、橋の李衡、こせ人とおひきたり

二十八日、^{ウラ}戸より^{コギ}出で、^大みなを^おふ。^{この}あひ
だみ、^はや^の守の子、山口の千岑、酒よま^{もの}の^ぞも^もて^まて
船^みい^れた^り。^尺ゆ^くゆ^くのみ^くふ

二十九日、^大湊^みを^まれ^り。^之す^くふ^りは^へて、^屠蘇^白散^ニ、^酒
ヲ^くは^へて^もて^またり。^尺ぶ^ーある^に似^たり

こ^ハ、^實ハ、^記行^なれ^ども、^日次^をた^てて^記せる^{もの}な^れば、
^日記^をは^題へ^るあり。^{され}ば、^旅日^記ハ^更あり。^何の^日記^に
ても、^日毎^ニ書^次く^べき^{もの}ハ、^{この}格^み從^ふべ^きなり

地誌

出雲風土記出雲郡の文

いづも^のこ^ほり

あ^はせ^て、^さを^やつ^こさ^どは^たち ^かむ^べひ^やつ^こさ^やふ^た

た^けべ^のこ^さ ^あつ^ぬの^さ ^かふ^ちの^さ

い^つも^のこ^さ ^まづ^さの^こさ ^いぬ^のこ^さ

み^たみ^のこ^さ

か^みの^なと^さを^い、^さを^こを^に、^こを^みつ^アリ
う^のの^さ ^こを^ふた^つ ^かむ^のの^さ ^こを^ふた^つ

い^づも^をな^づく^るゆ^ゑハ、^なを^をけ^るこ^ぞハ、^之に^のこ^ぞ

た^けべ^のこ^さハ、^こら^けの^ひむ^す、^をま^りふ^たさ^やあ^ま
り^ふた^もと^あま^りは^たま^りよ^あゆ^みノ^トコ^ロニ^アリ。^あゆ^を

みせのふハ、咫をやの略度不習了り。さて、ひせあゆみせハ、
 左を一足、右を一足出すを以ふ称あり。呼吸を十息を以ふに
 同ト。然れバひせあゆみハ、凡六尺を以ふなり。字典に、歩、説文
 行也。又、小爾雅、跬、一舉足也。倍、跬、謂之步。又、司馬法、六尺、爲一步。亦
 百、爲畝、也、あるを△
 都并のふふべし。さまふ、うやのさせとなづけしゆ意ハ、うや
 つべのみこせ、そのやまにあもりまき。すなハち、そのかみ
 のやしる、ひまになホ、こゝにませり。かれ、うやのさせとひ
 き。志あるに、のちにあらたえて、たけべせなづくるゆ意ハ、公
 まむ之のひ檢代のみやに、あ免の志る志るし免しと、す免ら
 みこせの「あふみこ、やまやだけのみこせのみなをわかれし
 せのりたまひて、たけべせさふ免たまふ。こハ、名、言語等比よ
 り。そのせまかむせのふみふるねを、たけべせさふ免たまひ
 き。すなハち、たけべのふみら、ひみしへよりひまふひたりて

なホこゝにをれり。かれ、たけべせを以ふ
 △漆野のさせハ、郡家のひむ東、五里させあまりふたも
 とあまりなとそ、あゆみノトコロニアリ。かむとすひのみこ
 せのふこ、あまつきちかみたるひこのみこせのみなを、また
 こもま批志都沼植ちやまをき。このかみ、させのうちいま
 せり。かれ、志つぬせを以ふ。すなハち、ほ倉らあり
 △河内のさせハ、郡家のみなみ、せをまりみさせあまりも
 とあゆみノトコロニアリ。ひ伊のおホか、このさせのうちを
 きたふなる。かれ、かふちせを以ふ。すなハち、つとみあり。あふ
 さ、もとあまりなとそ、つ志あまりひ五尺つさかアリ
 △出のさせハ、郡家のさ郡けにつけり

△并築 まづまのさせハ、^{郡家}の^西きたは^北たまりや^八させあまり
 六^十むそあゆみ^歩ノトコロニアリ。や^八つ^東のみづ^水おみづ^臣ぬの^{津野}みこ^命せ
 の、^國ふひ^引きたまひ^のち、あ^免の^志たつ^{くら}〜お^ほが^み
 のみ^やマ、つ^のへ^{まつ}ら^むせ、^もろ^くの^す免^がみ^たち、^みや
 せ^ころ^にま^るつ^せひ^て、^まづ^また^まひ^ま。物^名の^重り^て、^延か
 れ、^まづ^ませ^いふ
 △伊努のさせハ、^{郡家}の^正きた、^八や^里させあまり^なと^そま^りふ^二た
 あ^ゆみ^ノト^コロ^ニア^リ。之^にひ^引きたま〜^意美^豆努^のみ^こせ
 の^みこ、あ^赤か^ぶす^まい^ぬお^ほす^みひ^こさ^わけ^のみ^こせ^のや
 しろ、^すな^はち、^させ^のう^ちに^ませ^り。か^れ、^いぬ^せい^ふ
 △美談^談みた^みの^させ^ハ、^{郡家}の^正きた、^九この^させ^あま^りふ^二た^も百^と

あまり^四よ^十そ^あゆ^みノ^トコ^ロニ^アリ。あ^免の^志た^つくら〜
 お^ほが^みの^みこ、^和か^布都^努志^のみ^こせ、あ^免つ^ちは^初まり^判
 一の^ち、あ^天免^のみ^しろ^だの^かみ、^つら^へま^つり^ま〜^き。す^なは
 ち、^正ほ^倉ら^あり
 △宇賀^賀う^がの^させ^ハ、^{郡家}の^正きた、^七せ^をま^りな^とさ^せあ^まり^はた^十
 ま^りい^つあ^ゆみ^ノト^コロ^ニア^リ。あ^免の^志た^つくら〜^とお
 ほ^がみ^のみ^こせ、^神か^みむ^すび^のみ^こせ^のみ^こ、あ^やせ^ひ免^の
 み^こせ^を、^よは^ひま^す。その^せき、^ひ免^がみ^らう^べな^ひた^まハ^ず
 に^逃げ^の久^れた^まひ〜^やき、^おほ^らみ^らう^のい^ひま^ぎた^まひ〜
 せ^ころ、^これ^すな^いち、^この^させ^あり。か^れろ^のせ^いふ。す^なハ

ち、またのうみのはまふいそありなづまのいそをさづえ。た
 高かさ、ひやつ志ばりアリ。うへふ、まつ木生のまおひ昔げれり。い
 そふいたれば、さやびせの、あさ朝よひ夕ゆき往かふ来おごせ如。また
 きのえだ、ひせのよちひ引けるおごせ磯。いそより西に西のかた
 ふ、いは廣や戸あり。た高のさ、ひ廣ろさ、おのこ六尺むさ尺の尺百りナリ。
 心は心のうちふあなあり。ひ人せ得い得ら得ず。ふかさあさとを志
 らず。い必免に、このいその、いは必は必のほせりふいたるもの、か
 必あらず、志ぬやいへり。かれ、くにびせ、いふ必へよりい必まふい
 たりて、
 黄泉のさの
 黄泉のあな
 せいふ
 △神 戸のさやい、くうけの西に北きた、ふたさ二里をあまりも一百ま
 かむべのさやい、くうけの西に北きた、ふたさ二里をあまりも一百ま

りはたあゆみノトコロニアリ
 志む新造院ざう河内るむ、ひせくころ、かふちのさをぬちふあり。ごむ嚴せ
 うをたつ。ぐうけ郡家の正南み一十なみ、を三まりみ里さをあまりも一百あゆ
 みニアリ。もせの大こほり頼づ大のさのかみ、おま道部べのおみ臣ふ亦ぬ彌ぶ
 つく所水所る所なり

まづ井兼きのおほ大や社いろ み神たま魂のや社いろ み神む向ろ向ひ向のや社
 いろ い出づ雲ものや社いろ み神たま魂のや社いろ 以下、五中三社
 を記せり今こ
 略を
 △以 かのく上だ五十り、いそ八お所あまりや所をころ並い並みな神か神む祇づ官の
 さふあり

御前 みのさきのや社いろ お同な同ト御く御み御さ御ま御のや社いろ ま岐づ豆ま支の

やしろ以下、六十一社を記せり。今これを略く

かみ以上のくだり、むそぢあまりよ以上やしろ以上ハ、みな以上かむづ以上の
さにあらば

かむ以上なび以上やま以上ば以上ぐう以上けの以上ひ以上み以上あ以上み以上み以上さ以上せ以上あまり以上も以上百
まり以上い以上そ以上あ以上ゆ以上み以上ノ以上ト以上コロ以上ニアリ以上。た以上の以上さ以上、も以上と以上あまり以上あ以上と以上そ以上
まり以上い以上つ以上と以上あ以上アリ以上。免以上を以上まり以上い以上つ以上さ以上を以上あまり以上む以上そ以上あ以上
ゆ以上み以上アリ以上。そ以上ま以上の以上や以上の以上や以上しろ以上ます以上。ま以上ひ以上さ以上か以上み以上た以上ひ以上この以上み以上
こ以上や以上の以上や以上しろ以上、す以上な以上は以上ち以上この以上や以上ま以上の以上み以上ね以上に以上あり以上。か以上れ以上、か以上む以上な以上
び以上や以上ま以上せ以上い以上ふ以上

い以上づ以上もの以上み以上さ以上ま以上き以上や以上ま以上ば以上ぐう以上け以上の以上ま以上た以上ば以上たま以上り以上な以上と以上さ以上せ以上あ以上
まり以上み以上も以上と以上まり以上む以上そ以上あ以上ゆ以上み以上ノ以上ト以上コロ以上ニアリ以上。た以上の以上さ以上、み以上も以上と以上

まり以上む以上そ以上つ以上あ以上アリ以上。免以上を以上まり以上い以上つ以上さ以上を以上あまり以上む以上そ以上あ以上まり以上も以上百
と以上あまり以上む以上そ以上あ以上まり以上い以上つ以上あ以上ゆ以上み以上アリ以上。い以上づ以上もの以上ふ以上も以上せ以上い以上は以上
ゆる以上、あ以上免以上の以上志以上た以上つ以上くら以上と以上お以上ほ以上が以上み以上の以上や以上しろ以上ます以上なり以上
お以上ほ以上よ以上そ以上も以上ろ以上く以上この以上や以上ま以上ぬ以上み以上、あ以上ら以上ゆる以上之以上さ以上ま以上い以上、せ以上ころ以上づ以上
ら以上、ほ以上ぜ以上づ以上ら以上、あ以上ま以上な以上から以上す以上あ以上ふ以上ぎ以上、い以上を以上す以上き以上つ以上ち以上たら以上、と以上す以上の以上
ね以上、わ以上ら以上び以上、ふ以上ぢ以上、す以上も以上く以上、なる以上は以上ト以上か以上み以上、い以上へ以上に以上れ以上、あ以上ら以上ぎ以上り以上、志以上ろ以上
ぎ以上り以上、志以上ひ以上、つ以上ば以上き以上、ま以上つ以上、か以上へ以上ナ以上リ以上。せ以上り以上け以上だ以上もの以上み以上ハ以上、す以上な以上ハ以上ち以上
は以上や以上ぶ以上さ以上、や以上ま以上ば以上せ以上、や以上ま以上ぢ以上り以上、と以上ど以上ひ以上、つ以上み以上、あ以上ら以上ぎ以上り以上、志以上ろ以上、お以上ほ以上か以上み以上
う以上さ以上ぎ以上、ま以上つ以上ね以上、さ以上る以上、む以上さ以上と以上び以上あり以上。物以上名以上重以上り以上て以上延以上は以上
い以上づ以上もの以上お以上ほ以上か以上い以上、み以上な以上も以上せ以上ハ以上、は以上と以上ま以上せ以上、い以上づ以上も以上せ以上、ふ以上た以上え以上
に以上の以上さ以上か以上ひ以上ある以上、せ以上り以上の以上み以上や以上ま以上より以上な以上ふ以上れて以上、に以上た以上の以上こ以上ほ以上り以上

のよこたのむらにいで、すなはち、よこた、みせころ、みさハ、ふ
 せせものよさをへて、おほはらのこほりのさかひなる、ひ
 きぬまのむらにいで、すなはち、きすき、ひやろ、かむバラを
 ものよさをへ、いづものこほりのさるひある、たぎのむら
 小いで、かふち、いづものふたさをへ、きたふあふれて、さら
 ねを折れて、に西ふあふれ、すなはち、いぬ、まづきのふたさを
 へて、かむせのみづうみふゆる。地名多く重りて、延。これすな
 はち、いはゆる、ひのかはの志もあり。かほのに一のほせり、あ
 るひハ、つち土こえ、いづ五くさのたなつもの、くハ、あさ、い森なほ、志
 なえて、おほみたからの、うるほへるそのなり。あるハ、土休豊
 渡、くさ木きーげれり。すなはち、あゆ、さけ、ます、い伊くひ、あ助よし、う

あぎせものたごひあり。ふちせせもあ、く森れり。かほのくち
 より、かほかみの、よこたのむらにいたるあひだ、いづ五くのこ
 ほりのおほみたから、かほみたよりてをれり。はるのほとあ
 よりはるのすきまで、くれ木きをかせふ。ふねハ、かほあかをの
 ほりくたるなり。く森れり、かせふの二語、或人の書入れみ従
 おほみのを河は、みなもせハ、いづもの、みさ山まよりい
 て、きたふあふれて、おほらみふゆる
 いたぐきのいけハ、免門り、ふたもとあまりみそあゆみアリ
 すとひのいけハ、免池り、ふたもとあまりみそあゆみアリ
 にか西かえハ、免江り、みさせあまりもとまりいそまりやあ
 ゆみアリ。い〇ぐいながれてうみにゆる

おほかたのえは、えぐりふたもとあまりよそまりよあゆみ
アリ。ひむがしみなぐれてうみにいるふたつのえのみおも
せ、せもに、たみづのあつまるせころなり。ひむがし、ひり
うみ、ほか、みなはらふて、はるかありやまたりやまばせ、た
かべ、かも、をしせものたぐひあまたあり。ひむがし、ひりう
みナリ。あらゆるくさぐさのもの、あきかのごほりのせま
ごせのごせし
きたり、おほうみ、やまつのさきナリ
おほみのはま、ひろさ、ふたさやあまりもとまりはたあゆ
みアリ
けた多編ま

おのみのほま、ひろさ、よそまりふたあゆみアリ
うだほのはま、ひろさ、みそまりはつあゆみアリ
おほさきの志ま、たかさ、ひせつ、えぐりふたもとあまり
はそあゆみアリ
なつきのま
さきのほま、ひろさ、ふたもとあゆみアリ
えろま
あひのはま、ひろさ、はたあゆみアリ
にひのさき、なかさ、ひせさやあまりよそあゆみアリ。ひろ
さはたあゆみアリ。さきのみち、やまナリ。ひむがし
ハ、せをせほりて、ふねをほかよへり。かみ、すなハちまつ

まげれり

△宇保浦うればのうらひ、ひろさ、なとそまりやあゆみアリ

△山崎やまざま、いたかさ、みそまりことのつゑアリ。免○ぐり、ひやさ

やあまりふたもくあまりいそあゆみアリ

子負こおひのくま

△大崎おほさきのほま、ひろさ、もくあまりいそあゆみアリ

△御崎みさきのほま、ひろさ、もくあまりはたあゆみアリ

御嚴嶋

△御厨家みくりやのま、たのさ、よつゑアリ。免○ぐり、はたあゆみア

り

等々嶋ぞとま

怪聞崎ハ、なふさ、みそあゆみアリ。たのさ、みそまりふたあゆみアリ

△彦能保おのほのはま、ひろさ、をまりやあゆみアリ

粟嶋あゝま

黒嶋くろま

△道田はふたのはま、ひろさ、もくあゆみアリ

△二保ふたまたのはま、ひろさ、このそあまりやあゆみアリ

△門石かざし、たま、たのさ、いつゝゑアリ。免○ぐり、よそまりふたあ

ゆみアリ

△蒲そのとなぶはま、なふさ、みさをあまりもくあゆみアリ。ひ

ろさ、ひさをあまりふたもくあゆみアリ。まつ、まげりてお

ほくすな[△]いち、か^神むせの^水みづう^海みより、おほう[△]みせほりて
えの^長かぶさ、みさをアリ。ひろさ、もとあまりはたおゆみアリ。
これすな[○]いち、いづ^出もせ、か^神むせと、ふたこほりのさかひなり。
およそ、さたのうみふ、あらゆる、くさ^雑このもの、たてぬ[△]ひ
のこほり^郡のせまごせのごせし。たど、あ^鮫いび、いづものこほり、
もせ^尤もま^優されり。せるもの、い[△]はゆる、みさまの^海あまこれな
り
おほ[△]のこほり^郡のさか^堺ひある、さ^佐ふ^雜むら^村みせほりて、せをま
りみさをあまりむそまりよあゆみナリ。か[△]むせのこほりの
さのひある、いづものおほか[△]はのほせりみせほりて、ふたさ
せあまりむそあゆみナリ。お[△]ほはらのこほりのさかひある、

た^多ぎのむらみせほりて、せをまりいつさをあまりみそまり
やあゆみナリ。た[△]てぬひのこほりのさかひなる、う^宇か^加の^川あ
せほりて、せをまりよさをあまりふたもと、あまりはたあゆ
みナリ

凡べて、風土記ハ、地誌なれども、皆漢風^漢み拘泥^拘免るより、皇
國の古言みよまるべきもの稀^稀。此の出雲風土記ハ、古事
記なせみ近く、古言みよまるべく書き成し、はた、體格よ
やくのへるものなり。故、これを地誌の祖書せず。猶、本書み
就きて學び得べきなり

丹後國風土記天橋立の文

よ[△]さのこほり^郡、く^郡う^家けのう[△]せらのすみのかたみ、は[△]やく^石の

さぞあり。このさぞのうみふ、あぶく、おほまある、心そさきあり。な。おさ、はたちあまりふたもとあまりはたまりここのつあ。あり。ひろさ、あるせころい、ここのつあたらすあり。あるせころい、せつああまりはたつあたらすあり。さきを、あ免のはしだてせなづけ、ありを、くのはませあづく。あ。いふゆあ、く、にうみませるおほみのみ、いざなきのみこせ、あ免かよひまさむた免ふ、はいつくりたてたまひき。かれ、あ免のはしだてせいふ。おほみのみねませるあひだふ、たふれふし。ま。かれ、あやしび、まき。かれ、くびのはませいふ。これのなからを、くしせいひ、これより、ひむぶのうみを、よさのうみ

せいひ、にのうみを、あそのうみせいふ
 地理を書むふ、此の文よ従りて、その體を考へらまし
 かバ、とま志る牙あらまし

戦記

古事記神武天皇東征の文

かれ、そのくに、より、のぼるいでますせまふ、なみは、やのわたりをへて、あををもの志らかたのつみはてたまひき。このせま、せみのなるすねひこ、いささをあこして、まちむるへてたくかひいかバ、みふねみいれたるたてをせりて、おりたちあまひき。かれ、そのあを、たてづせつけつるを、いまに、くさかのたでづせなもいふ。こくみ、せみびこせたくかひた

まふせまふ、^五つせのみ^命を、みてみ、せみひこぢ、^痛いたや^事を
 をおはしき。^〇かれこ^二に、のりたまはく。^一あ、ひの^神かみのみこ
 せして、^日ひむるひてた^〇かふこせふさは^良は^不かれ、やつこ
^痛いたでを^手おもひつる。^〇まよりはも、ゆき免^〇りて、^日ひをせ
^頁おひてこそうちて免^〇せ、ちぎりたまひて、みなみのかたよ
 免^〇り^〇いでますまふ、^血ちぬの^海うみふ^〇たりて、そのみて
 ちを、あらひたまひき。^〇こハ言語ハよりて、^〇かれ、^血ちぬの^海うみ
 ハいふなり。そこより、免^〇り^〇いでまして、^〇まの^〇ふの、^男をの^水み
 な^〇ひ^〇たりまして、^〇のりたまはく。^〇つこ^〇てを^〇おひてや、
^〇のち^〇すぎなむせ、^〇を^〇た^〇け^〇び^〇して、かむあ^〇り^〇ま^〇ぬ。^〇かれ、そ
 のみ^〇あ^〇せ^〇を、^〇の^〇み^〇あ^〇せ^〇と^〇い^〇ふ。^〇ふ、^〇は^〇か^〇い、^〇や^〇ぶ^〇て、^〇ま^〇の^〇く^〇に

の、^〇か^〇ま^〇や^〇ま^〇ふ^〇あ^〇り。^〇かれ、^〇か^〇む^〇や^〇ま^〇せ^〇い^〇は^〇れ^〇ひ^〇こ^〇の^〇み^〇こ^〇せ、^〇に^〇は^〇の^〇み^〇を^〇え^〇ま^〇し、^〇また、^〇み
 こより、免^〇り^〇いでまして、^〇ま^〇ぬ^〇の^〇む^〇ら^〇ふ^〇い^〇で^〇ま^〇せ^〇る^〇せ^〇ま
 に、^〇お^〇ほ^〇さ^〇ある^〇く^〇ま、^〇や^〇ま^〇より^〇い^〇で^〇、^〇す^〇あ^〇ハ^〇ち^〇う^〇せ^〇ぬ。^〇こ^〇に、
 かむ^〇や^〇ま^〇せ^〇い^〇は^〇れ^〇ひ^〇こ^〇の^〇み^〇こ^〇せ、^〇に^〇は^〇の^〇み^〇を^〇え^〇ま^〇し、^〇また、^〇み
 こ^〇の^〇さ^〇、^〇み^〇あ^〇を^〇え^〇て^〇こ^〇や^〇し^〇き。^〇この^〇せ^〇ま^〇ふ、^〇く^〇ま^〇ぬ^〇の^〇た^〇ら^〇く^〇ら
^〇た^〇ち^〇を^〇ち^〇て、^〇あ^〇ま^〇つ^〇か^〇み^〇の^〇み^〇こ^〇の、^〇こ^〇や^〇せ^〇る^〇せ^〇こ^〇ろ^〇み^〇ま
 め^〇ま^〇て、^〇た^〇て^〇ま^〇つ^〇る^〇せ^〇ま^〇ふ、^〇あ^〇ま^〇つ^〇か^〇み^〇の^〇み^〇こ、^〇す^〇あ^〇は^〇ち^〇さ^〇免
 ま^〇して、^〇あ^〇い^〇若^〇つ^〇る^〇か^〇も^〇せ、^〇の^〇り^〇た^〇ま^〇ひ^〇き。^〇こ^〇ハ、^〇名^〇を^〇言^〇語^〇を
^〇た^〇る^〇格^〇、^〇か^〇れ、^〇そ^〇の^〇た^〇ち^〇を^〇う^〇け^〇せ^〇り^〇た^〇ま^〇ふ^〇せ^〇ま^〇ふ、^〇そ^〇の、^〇く^〇ま^〇ぬ
 の^〇や^〇ま^〇の^〇あ^〇ら^〇ぶ^〇る^〇か^〇み、^〇お^〇の^〇づ^〇か^〇ら、^〇み^〇あ^〇、^〇ま^〇り^〇た^〇ふ^〇さ^〇え^〇て、^〇か
 の、^〇を^〇え^〇こ^〇や^〇せ^〇る^〇い^〇く^〇さ、^〇こ^〇せ^〇と^〇に^〇さ^〇免^〇たり^〇き。^〇こ^〇ハ、^〇上^〇の、^〇を
 えて^〇こ^〇や^〇し

きみ對い、かれ、あまつかみのみこ、そのたちをえつるゆゑをせ
 ひたまへば、たかえらぶみこたへまをさく。おのれは免ふ、あ
 までらすおほみゐる神、たのぎのかみ、ふたばしらのかみのみ
 こせもちて、たけみゐづちのゐみを免してのりたまはく。あ
 しはらのあつとみ、いたく、さやぎてありけり。あぶみこ
 たち、やぐさみすらし。かの、あしはらのあつとに、もは
 ら、いましむ、こせむけつるゑにあれば、いまし、たけみゐづち
 のかみ、ぐだりてよせ、のりたまひき。こゝに、みこたへまをさ
 く、おのれ、ぐだらびせも、もはら、かのゑにむけし、たちあれば、
 ぐだしてむ。このたちをぐださむさまい、たのえらぶら
 のむねをうぶちて、そこよりおやし、いれむや、まをたまひ

①か、れ、た、け、み、の、つ、ち、の、か、み、を、し、へ、た、ま、は、く、の、ま、し、ら
 ②の、む、ね、を、う、ぶ、ち、て、③の、た、ち、を、ぐ、だ、さ、む、さ、ま、い、た、の、え、ら、ぶ、ら
 ④の、い、ま、し、む、こ、せ、む、け、つ、る、ゑ、に、あ、ら、ば、い、ま、し、た、け、み、ゐ、づ、ち
 ⑤の、か、み、を、さ、く、の、り、た、ま、ひ、き、こ、ゝ、に、み、こ、た、へ、ま、を、さ、く、
 ⑥の、あ、し、は、ら、の、あ、つ、と、に、も、は、ら、か、の、ゑ、に、む、け、し、た、ち、あ、ら、ば、
 ⑦の、ぐ、だ、し、て、む、こ、の、た、ち、を、ぐ、だ、さ、む、さ、ま、い、た、の、え、ら、ぶ、ら
 ⑧の、む、ね、を、う、ぶ、ち、て、そ、こ、よ、り、お、や、し、い、れ、む、や、ま、を、た、ま、ひ

へたまひき。かれ、い免のをしへのまゝに、つを免て、おの
 くらをみし、おは、まこせみ、たちありき。かれ、このたちハ、たて
 まつるみこそアしやまをしま。こハ、殊更み、言語多し、
 こみまた、たかぎのおほみゐるのみこせもちて、さやしまをし
 たまはく。あまつかみのみこ、こよりおくつかある、な、
 ましそ。あらぶるかみ、いせおほかり。いまあ免より、やた
 すをおこせむ。かれその、やたがらすみちびきてむ。その、た
 むありよ、い、でますべし、さやしまをたまひき。こも、上

な[△]かれその、みさせーのまにまに、その、やたらら[△]のありよ
り、い[△]でまーとるバ、え[△]ぬ[△]は[△]の、かば[△]り[△]み[△]は[△]たり[△]ま[△]き。
や[△]き[△]み、や[△]あ[△]を[△]う[△]ち[△]て、か[△]や[△]る[△]ひ[△]を[△]あ[△]り[△]ま[△]き。こ[△]に、あ[△]ま[△]つ[△]か[△]み
のみ[△]こ、い[△]ま[△]ー[△]は[△]た[△]れ[△]ぞ[△]や[△]、や[△]は[△]ー[△]け[△]ま[△]バ、あ[△]い[△]、[△]くに[△]つ[△]か[△]み、あ[△]
ハ、に[△]へ[△]も[△]つ[△]の[△]こ[△]ナ[△]リ[△]や[△]ま[△]を[△]ー[△]ま[△]き。そ[△]こ[△]よ[△]り[△]い[△]で[△]ま[△]せ[△]バ、を[△]あ
る[△]ひ[△]や[△]、あ[△]よ[△]り[△]い[△]で[△]く。そ[△]の[△]あ[△]ひ[△]の[△]ま[△]き。い[△]ま[△]ー[△]は[△]た[△]れ[△]ぞ[△]や[△]
は[△]せ[△]バ、あ[△]い[△]、[△]くに[△]つ[△]か[△]み、あ[△]ハ、[△]あ[△]び[△]か[△]ナ[△]リ[△]や[△]ま[△]を[△]ー[△]ま[△]き。か[△]く[△]て、
そ[△]の[△]や[△]ま[△]あ[△]い[△]り[△]ま[△]ー[△]か[△]バ、[△]また[△]、[△]を[△]あ[△]る[△]ひ[△]や[△]あ[△]へ[△]り。こ[△]の[△]ひ
や、[△]い[△]は[△]ほ[△]を[△]あ[△]ー[△]わ[△]け[△]て[△]い[△]で[△]く。い[△]ま[△]ー[△]は[△]た[△]れ[△]ぞ[△]や[△]と[△]は[△]せ[△]バ、
あ[△]い[△]、[△]くに[△]つ[△]の[△]み、あ[△]ハ、[△]い[△]は[△]あ[△]ー[△]わ[△]く[△]の[△]こ[△]ナ[△]リ。い[△]ま、[△]あ[△]ま[△]つ[△]か
み[△]のみ[△]こ、[△]い[△]で[△]ま[△]す[△]や[△]ま[△]け[△]る[△]ゆ[△]ゑ[△]み、[△]ま[△]る[△]む[△]か[△]へ[△]ま[△]つ[△]る[△]み[△]こ

そ[△]ア[△]レ[△]や[△]ま[△]を[△]ー[△]ま[△]き。こ[△]も、[△]言[△]語[△]み[△]よ[△]り[△]て、[△]そ[△]こ[△]よ[△]り、[△]ふ[△]み[△]う[△]ら[△]ち
こ[△]え[△]て、[△]う[△]だ[△]み[△]い[△]で[△]ま[△]ー[△]ま[△]き。か[△]れ、[△]う[△]だ[△]の[△]う[△]ら[△]ち[△]や[△]い[△]ふ。か[△]れ[△]こ
こ[△]み、[△]う[△]だ[△]み、[△]え[△]う[△]か[△]し、[△]あ[△]や[△]う[△]ら[△]の[△]し[△]や、[△]ふ[△]た[△]り[△]あ[△]り[△]け[△]り。か[△]れ[△]ま
づ、[△]や[△]た[△]ら[△]す[△]を[△]つ[△]ら[△]は[△]ー[△]て、[△]ふ[△]た[△]り[△]に[△]や[△]は[△]ー[△]免[△]た[△]ま[△]は[△]く。い[△]ま[△]
ま、[△]あ[△]ま[△]つ[△]か[△]み[△]の[△]み[△]こ[△]い[△]で[△]ま[△]せ[△]り。い[△]ま[△]ー[△]や[△]も、[△]つ[△]か[△]へ[△]ま[△]つ[△]ら
む[△]ト[△]ト[△]ハ[△]シ[△]キ。こ[△]も、[△]え[△]う[△]か[△]、[△]あ[△]り[△]か[△]ふ[△]ら[△]を[△]も[△]ち[△]て、[△]そ[△]の、
み[△]つ[△]ら[△]の[△]ひ[△]を、[△]ま[△]ち[△]い[△]ら[△]へ[△]ー[△]ま[△]き。か[△]れ[△]そ[△]の、[△]あ[△]り[△]か[△]ふ[△]ら[△]の[△]あ[△]ち[△]あ
り[△]ー[△]や[△]こ[△]ろ[△]を、[△]か[△]ふ[△]ら[△]さ[△]ま[△]せ[△]い[△]ふ。ま[△]ち[△]う[△]た[△]む[△]せ[△]い[△]ひ[△]て、[△]い[△]く
さ[△]び[△]や[△]を[△]あ[△]つ[△]免[△]ー[△]か[△]や[△]も、[△]え[△]あ[△]つ[△]免[△]ざ[△]り[△]ー[△]ら[△]バ、[△]つ[△]ら[△]へ[△]ま[△]つ
ら[△]む[△]せ[△]い[△]つ[△]ハ[△]り[△]て、[△]お[△]ほ[△]や[△]の[△]を[△]つ[△]く[△]り、[△]そ[△]の[△]せ[△]の[△]こ[△]う[△]ち[△]み、[△]あ
ー[△]を[△]は[△]り[△]て、[△]ま[△]ち[△]け[△]る[△]や[△]ま[△]き[△]み、[△]あ[△]や[△]う[△]か[△]ー[△]ま[△]づ[△]、[△]ま[△]る[△]む[△]ら[△]へ[△]て、

おろがみてまをさく。こゝ所作の終く、延はりたる格あり。「あゝあに、えうかじ、
 あまつかみのみこの、みつゝのひを以てのへし、まぢせえむせし
 て、以てさをあつむれせも、えあつ免ざれば、おほげのをつゝ
 り、そのうちふおしをばりて、まぢせらむせす。かれまるむか
 へて、あらはしまをすせまをくま。こゝも言語より、延はりたる格あり。こゝに
 おほげものむらじらおや、みちのおみのみこせ、ええのあ
 たへらおや、おほえの命の命こせふたり、えうかじを免して、
高麗のりて以てけらく。伊賀のつゝりつゝのへまつれる、おほげの
内うちふお、おれ、まづいりて、そのつゝのへまつらむせするま
 を、あゝまをせせ以て、
全横カつるぎのたのみせり志はり、
ほほこ由氣ゆけ矢や利しとと
おお

ひいらくせまきふ、おのほはりおける、おしにうたえて志にま。
言語を綾語よりすあいち、ひまひだして、きりはふりき。か
 れそこを、うだのちば原をおもひふ。志あして、そのおせうか
斯いぶ、たてまつれるおほみあへをば、こせづくふ、そのみひく
 さびせどもにたまひま。このせまきふ、みうたをみしたまはく。
 うだの、たのきふ、志ぎわおはる、
わおまつや、志ぎいさやら
いすくはく、ちらさや
 だ、こあみ、お、あこはさば、たちそびのみ乃、なげくを、こ
 り、ういありお、あこはさば、いちさのきみ乃、おほけくを、こ
 きくひあぬ、えくくや、こくや、こい、いごのふぞ
 きあひあぬ、あくくや、こくや、こい、あざわらふぞ
 トウタヒ

タマヘリ。

二ハ、誰文の錯れ入りたる

二ハ、あざわらふぞのニ

カレそ乃

おせうか

二ハ、誰文の錯れ入りたる

ふみ、この

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

うだのもひ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

あやまれる

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

なるべし。

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

りませるせき

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

りて、まちい

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

ちて、やそ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

あてく、やそ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

かくはでせ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

まひき。

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

うる、

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

おさ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

みづし、

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

ちて

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

た

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

か

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

より

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

かり

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

せ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

みづ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

ちて

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

た

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

か

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

より

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

かり

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

せ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

みづ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

ちて

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

た

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

か

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

より

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

かり

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

せ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

みづ

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

ちて

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

た

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

か

註文ハ、註文から比して「かれその、おせうか」ハ

また、

みづこくく、之免のこらぶ、かきもせみ、うきくはくかみ、く
ちひぐく、われハわすれど。うちてしやまむ。
また

かむるぜの、いせのうみの、おひくみ、はひもせほろふ、志た
どみの、いはひもせほり、うちてしやまむトウタヒタマヘリ
また、えくき、おせくきを、うちたまへるせきに、みいさ、志ま
くハ、つ、のれたりき。そのせきのおほみうたハ、

たくな免て、いなさのやま乃、このまよも、いゆきまらひ
あくかへバ、われはやきぬ、志まつせり、うのひがせも、いま
すけみこねトウタヒタマヘリ
こハ、歌みよりて、延
はりたる格なり。

かれこくに、みきはやびのみこせまるきて、あまつかみのみ

こみまをさく、あまつらみのみこ、あもりまぬせ、さくつる
ゆるみ、おひてまるくたりきつせまをして、すあはち、あまつ

志る、をたてまつりて、つらへまつりき、かれ、にきはやびの
みこせ、やみびこおひも、せみやび免みあひて、うみませる

こ又、うま、まぢのみこせ、
あまをい。
こハ、ものくべ此むらど、
ほづみのおみうぬべの

おみのお、かれ、のくのごせ、
あらぶ、
あつろはぬひせどもを、はらひた

やば、
たまひて、うぬびのか、
まつろはぬひせどもを、はらひた

免の、あきろ、免くき、
綾語によりて、延ハ
りたる格なり

古事記師水垣宮崇神天皇の段埴安擊の文

このみよみ、
 高志の志、
 東の東、
 且つ、
 ろはぬひやぶるを、こそむけやいさゝ免、
 のみか、
 延、
 かりひますやまふ、
 免、
 たまひま。

ぶかふたてりて、うたひけらく、

こはや。みまき、ゆりびこはや。みまき、ゆりびこはや。おのび

をく、ぬほみ志せむせ、

久、志らふせ、みまき、ゆりびこはやトウタヒキ

こくに、おほびこのみこせ、あや、

て、そのをせ免み、

ひたまへバ、をせ免、

つれせこたへて、ゆえへもみえ、

りたる格あり、

まはる。こゝハ、おもふに、やま志ろのくみなる、あがまとせ、たけ
はみやすのみこに、またあまこころをおこせる、志るしみこ
そあら免。をぢ、心くさをおこして、ゆるせのりたまひて、す
なハち、わにのおみのおや、ひこくにぶくの命をそへて、
つやはすやまみ、わにが坂、いはひべをすあて、まかりひま
しき。こハ、言語よりて、ここみ、やましるのわが河はあ、ひ
たまるやまみ、その、たけはにやすのみこ、心くさをおこして
まちさへざり、おのもくこ、かはをあらあまきて、むきたち
てあひひやみき。こハ事の繁くて、延か、れ、そのなを、ひやみ
やひひしを、ひまハ、ひづみやをひふ。こくに、ひこくにぶくの
みこを、そなたのひや、まづ、ひはひやはあて、こふまるとに、た

けはにやすのみこ、いづれをもえあてざりき。こくに、くにぶ
このみこを、はあてるやハ、たけはにやすのみこふ、いあて
てあみき。かれ、その心くさ、こやぶるやぶれて、たげあらけ
ぬ。こくに、その、にぐる心くさをあひせえて、久須婆のわたり
ふひあるやまみ、みな、せえらえた、かみて、久そひでくはの
まみりくりき。かれ、そのあを、久そばあまやひしを、ひま
ハ、久須婆、やぞひふ。また、そのにぐる心くさをさへざりてき
まば、うのごや、あひみうきたりき。かれ、そのかハを、うかハや
ひふ。また、その心くさびやをまりはふりき。かれ、そのあを
はふりぞのやあもひふ。か久、こやむけをへて、まゐのぼりて、
かへりごやまをうたまひき

古事記師木玉垣宮天皇の段沙本毘古擊の文

△このす免らみこせ、さほ本毘古び免を、まさきせ志多まへるせきい
さほび免のみこせのいろせ、さほ本毘古びこのみこ、そのいろもに
をい夫ろせせハ、いづきおはくまやとへバ、兄ろせぞハくま
や、こゑへたまひま。此ハ、名や言語や重り△延はりたる格あり。△こくに、さほびこの
みこ、はありならく、此ハ、事繁く言語重り△みま、まこせみ、あれをばくかもあさ
バ、われをみま、せ、あ免の志たを志りてむせすをいひて、此ハ、事繁く言語重り△す
あはち、や、ハ、鹽ちをりのひもがたなをつくりて、そのいろもに
さづけて、此ハ、事繁く言語重り△のカタおもて、おちぎみのみ祢ませらむを、さ
ころくまつれをいふ。此ハ、事繁く言語重り△延はりたる格あり。△かれ、す免らみこ
や、そのはありごせを、志ろく免さびて、そのまさきの、みひざ

をま枕くらぎてみねま言き。△こくみ、そのまさき、ひもがたおも
て、それおほみ御く頭びを、さくまつらむせして、三みた度ひまで、ふり
たまひくのを、たへ言てみ、かなくおもほして、えさくま
つらびて、あきたまふみなみだ、おほみおもみおちあがきま。
此ハ、所作の繁くて、△延はりたる格あり。△かれ、す免らみこせ、おせろさまして、その
まさきみやひたまハく。あ、あや言くま言免みたり。此ハ、事繁く言語重り△さほの
たより、は暴や雨さ免ふりきて、此ハ、事繁く言語重り△いハのあ、あむみおもをぬら言つ。
また、に録き色いろなるへみ、小あがみ地くび言なもまつへり。△か
くのい免ハ、あ何みの志表るくみ、あらま言せをひたまひま。△こ
此ハ、事繁く言語重り△延はりたる格あり。△こくに、そのまさき、あらそハえどせおもほ
して、まを天したまハく。あ言のいろせ、さほびこのみこ、あ天き言み言を

やいろせせの、いづれははくまをくひたりき。かくせふにハ、
 えおもがたずて、いろせぞはくまをこゑへつれば、あれみあ
 せらへけらく、あれやみまへせ、あゑの志多を志らさむ。かれ、
 おほぎみを志せまつれを以ひて、やへほをりのひもぶたか
 をつくりて、あれふさづけつ。こくをもて、おほみくびをさし
 まつらむせして、みたひまでふりへのせも、たちまちふかか
 しくありて、えさしまつらびて、なきなるなみ富のおちて、お
 ほみおもをぬらいつ。のあらび、これあるにこそあら免せ
 まをいたまひき。この言語多くして、このに、す免らみこせ、あ
 ハ、ほせくくみ、あざむるえつるかもせのりたまひて、すおは
 ち、い久さをあこして、さほびこのみこを、せりみつのはすせ

きに、そ乃みこ、いなぎをつくりてまちたかふ。これハ言語
 之して延ハリ。このをき、さほび免のみこせ、そのいろせを志
 たる格なり。この後、志りつみのせより、にげいで、それのいなぎ
 もほへのねて、志りつみのせより、にげいで、それのいなぎ
 にいりまき。このをりも、そのまきまはらまたりき。この
 くに、す免らみこせ、そのまきまはらまたりき。この
 みせせみなりぬるに、はらましてさへあることを、いせの志
 へせおほほしきかれ、そのいくさを、やすらハ志免つ、すむ
 やけく、せ免たまはざりき。△如此、返
 の、はらませりし、みこも、あれまぬかれ、そのみこを以だ
 て、いなぎのせみおきまつりて、す免らみこせ、まをさ志免

うつくし
 ともみ

たまはく。このみこをば、おほぎみのみこぞ、おもほし
 さば、をさ免あまはた、よをさし免たまひた。こゝに、す免らみ
 こぞ、そのいろせをこそ、きらひたまへむ。ななきさまをば、
 や、かなしおおもほせりぬまば、それ、えたまはむのみこころ
 ましき。こゝをりて、いささびせのあのみ、ちのらびせのはや
 きをえりつせへて、のりたまひつらえハ、かのみををらむ
 やき、そのは、みこをも、おそひをりてよ。みのみふまれ。
 〇みてふまれ。〇お取り
 えむまにこゝつのみてひまは出でまつれせのりたまひき。語
 みよりて、こゝに、そのまさき、何らおど免を免みこゝろを志
 延ハれり。こゝに、そのみのみををりて、そのみのみも
 りたまひて、こぞごこみ、そのみのみををりて、そのみのみも

て、みかいらをおほひ、まゑ、たまのをくくたして、みてみ
 まゝ、また、さけもてみけしをたして、またきみぞのごや
 けせり。綾語より、かく、まけをなへて、そのみこをむだきて、
 まのむさし、いでたまひま、かれ、そのちのらびせも、その
 域外、みこををりまつりて、すなはち、そのみおやををりまつらむ
 そのみおみをせれば、みか—みおのづのらお—ち、
 や、そのみて—をせれば、たまのをま—た—た—え、ぬ。こも
 所作、そのみぞ—をせれば、みぞ—すなは—ちやぶき
 を綾語より、こゝをりて、そのみこををりまつりて、
 延はりたる格あり。そのみおやをば、えたりまつらざりき。かれ、そのいとさびせ
 ぞも、かへりまるまてまを—つらく。

^ふの^みお^のの^づの^らお^ち
^みそ^ま たやぶき^ふの^ば
^みて^ふま^のせる^たま^のをも^たえ
 〓 えまつら^び
 〓 ぜ^まを^す
 りえまつりつ。

免らみこせ、そのまさたふのらゝ免たまはく。すべて、この名
 ハ、のからずはと名もつくるを、このみこのみおをバ、おふせ
 かつけむせ、のらゝ免たまひま。かれ、みこるへまをゝたまハ
 久。ま、いなぎをやくをりも、ほあのみあれませれば、その
 みなハ、ほむちわけのみこせぞ、つけまつるべきや、まをさゝ
 免たまひま。また、^あの^ふして、^ひるゝまつらむせ、のらゝ免た

^まへ^るに、^みお^もを^せり、^てひ^るゝまつ^るべ^し
^あほ^ゆあ^わの^ゆあ^をさ^あ免
 せ、まをゝたまひま。かれ、そのまさまの、まをゝたまひのま
 まみ、ひるゝまつりま。ま、そのまさまみ、^みまゝの^かた^免、
^美豆^能小^佩 ^みつ^のを^ひも^ハ、^たま^かも^せか^むせ^とは^ゝ免^たま^へバ、^た且^み
^波の^ひこ^たい^すみ^ちの^うゝの^みこ^れみ^むす^免、^あハ、^えひ^免、
^おせ^ひ免、^この^ふた^ばゝ^らの^ひ免^みこ^ぞ、^きと^きお^ほみ^たの
 らみませバ、つかひたまふべし。せ、まをさゝ免たまひま。こハ、
 重りて、延はり。あありて、つひみ、そのさほびこのみこをせ
 たる格あり。糸のありて、つひみ、そのさほびこのみこをせ
 りたまへるみ、そのいろもと志たがひたまひま

古事記訶志比宮の段神功皇后忍熊撃の文

こゝに、おま息な長ぶ帯たら日ひ費の命み命こ命ぞ、やまままふふ、かへりのぼ

 りますまふふ、ひせのころろ、うたがいきにとりて、もふぬぬ

 をひせつそあへて、みこをそのもふぬぬぬのせまつりて、まつ

 ぷこいはばやくかむさりまぬせ、いひもらさい免たまひき。

この事を所作せ言語をふ△

とりて、延はりたる格あり。かこして、のぼりいでますまふふに、

かこさのれみこ、おいくまのみこまこて、まちをらむせおも

かして、おのぬぬふすくみいでくうけひがり志たまひき。△

に、かこさのれみこ、くぬぎにのぼりまして、みたまふふふ、おほ

きあるいのりみいでくそのくぬぎをほりて、すあいち、その

かこさのみこをくひつ。△そのみおお、おいくまのみこ、その

志わざをもかこまびて、いくさをおこいまちむのへたま

ふやまに、もふぬぬむかひて、むあいぶぬをせ免たまはむせ

す。かれ、そのもふぬぬを理いくさをおろしてたこかひき。△この

やまに、おいくまのみこに、なにいはきいべのおや、い

ひつぎのみこのみらたふい、わにいはきいべのおや、い

さ佐比ひ比のすくぬを、いくさのきみを志

にいねこのたけふるくまのみこをぞ、いくさのきみを志

たまひ、ける。△この綾語ふよりて、△かれ、おひそけて、やまいろふ

いふまるやまふ、かへりたちて、おのもこここ志りぞのいて、

あひたこのひき。△このに、たけふるくまのみこをたばかりて、

おまなぶたらいひ免のみこをいはばやくかむさりまいぬれ

ば、ばらみたこがふべきことをなすを以て免て、ゆづら絶をた
 ちて、心欺つはりてまつろひぬ。こハ言語を事をみとりこゝに
 その心くさのまみ、すでみ、いつ詐はりをたのみて、信
 ば誹つし、てまこゝに、あまふさのあより、まけたるつらをを
 し藏をさ免言て、さ言こゝに、あまふさのあより、まけたるつらをを
 り以て、さらにはりて、おひうちまかれあふさ坂かみ、にげ志
 りぞきて、む對ま立ちて、また、あまかひけるを、おひせ免やぶり
 て、さ沙々那美なみみ心でとあも、こぞとみ、その心くさをきりけ
 る。こゝに、そのおしこまのみこ、心さひのすくねやとも、お
 ひせ免らえて、

ふねみの二里
 しうみふうのひ

心心あまふさのあより、まけたるつらをを
 のうみみ、かづさせなわ

せうあひて、すなはち、うみみ心りて、せもみうせたまひぬ
 凡戦記ハ、此等の文を、よく読み、よく玩味イダひて、其の語勢を
 移し、はた、時世み合せて、工夫を免をらゝあば、如何ある混
 亂猛劇の事態ありやも、書き得らなきなむのし

上件の條々を、記事作文の準據すやす。凡、作文を學バむハ、記事
 を始免やすまば、先、舉ぐるなり。直助、年ハ老あれども、するわ
 ざの若くて、文ハ心まだ作かき得ずなむ。然ハあれども、今ハ心

を、千年餘りむかひみ上せ、思ひを、遠き神世に遣り、言靈の幸
ふ國の言靈の道を探ね、言靈の助くる國の言靈の法を索え
て、記事文の格例を論ずること、是の如し。なほ、祝詞、宣命、及其
の他乃文格の如きハ、卷を逐ひて、おぎくくみ辨ふべきなり

國文學桂二之卷終

明治十五年十二月廿七日版權免許
明治十八年五月 出版

定価八圓

神奈川県平民

著述人

權田直助

相模國大住郡大山町
第三百二番地居住

東京府平民

出版人

柳瀨喜兵衛



日本橋區橋町
四丁目十八番地居住

1
2
108

